

## 特集：解放80周年、日韓国交正常化60周年を迎えて

<https://hdl.handle.net/2324/7434196>

---

出版情報：韓国研究センター年報. 26, pp.17-62, 2026-03-21. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



特集

解放 80 周年、  
日韓国交正常化 60 周年  
を迎えて



## ◆特集：

# 「解放80周年、日韓国交正常化60周年を迎えて」

## 1. 特集について

---

出 水 薫（九州大学韓国研究センター長）

2024年に九州大学韓国研究センターは開設25周年を迎えた。四半世紀にわたり日本国内における韓国学（Korean Studies）を牽引してきた韓国研究センターは、今や国内最大規模のセンターとして、国内外のネットワークを活かし、共同研究の拠点となっている。

そして2025年は、言うまでもなく、朝鮮半島植民地が解放されて80周年の年であり、また、日韓国交正常化から60周年の年でもあった。

そこで2025年度の年報では、韓国研究センターの四半世紀の活動を踏まえつつ、解放80周年、国交正常化60周年にあたり、センターの過去を振り返るとともに、今後の韓国学の展望を考えるということで、歴代センター長の対談・鼎談による特集を組むことになった。

対談は、九州大学名誉教授で、センター設立の過程から関わり、初代センター長をお務めになった石川捷治先生と、現在の出水薫センター長によりおこなわれた。ちなみに出水センター長は、設立時のセンター教員でもっとも若く、設立メンバーとしては、最後の現役である。センターの設立の経緯などは、九州大学の100年史などでも詳細に説明されているが、当時の息吹を感じられる石川名誉教授とのやりとりは、歴史的な証言・資料ともなるだろう。

鼎談は、直近3代のセンター長による。第5代センター長を務められた深川博史名誉教授は、出水センター長と同様に、設立時のメンバーであった。移転やコロナ禍に翻弄されつつも、一時の停滞期を乗り越え、現在の韓国研究センターへの起点となった時期を牽引された。また第6代センター長をお務めになった元兼正浩教授は、韓国研究センターの活動を介して韓国研究に関わるようになり、移転後の各種の懸案の対応でご苦労をなさった。お二人の直近の歴代センター長を交えた鼎談は、韓国研究センターの現状を確認しつつ、将来のあり方への示唆に富むものとなっている。

通常の学術研究を中心とする特集とは異なるが、対談も鼎談も、読者のみなさんが韓国研究センターの現状を理解し、さらに韓国学研究の今後を展望する上で、参考となることを願っている。

## 2. 特別企画

# 1 村井正隆氏（福岡県日韓親善協会副会長）へのインタビュー

聞き手：山口祐香（九州大学韓国研究センター助教）

### □プロフィール

村井 正隆（むらい まさたか）ムライケミカルバック(株)代表取締役社長／福岡県日韓親善協会副会長  
1944年3月31日、三井郡北野町（現・久留米市北野町）生まれ。久留米高校卒業。  
アメリカニューポート大学日本校、同大学院卒（通信過程）。  
1991年 日韓親善協会中央会会長功労賞（会長：衆議院議員・田中龍夫）。97年6月、韓日親善協会中央会感謝状（会長：国会議長・金守漢）。99年11月、福岡市市政功労者表彰。2007年1月12日、大韓民国修交崇禮章受章

★日韓国交正常化60周年を迎えた2025年。日本の敗戦／韓国の植民地解放以後、断絶していた両国間関係が再出発し、限定的ではあったものの民間交流の端緒が開かれた。その中で、日韓両国の親善友好と相互理解の促進を図る民間交流団体として設立されたのが「日韓親善協会」である。なかでも、福岡県日韓親善協会は、日韓親善協会中央会の設立（1976年5月）にも先んじて、全国の地方協会の中で最も早い1975年6月に設立された。その設立段階から関わり、現在も副会長を務めておられるのが村井正隆氏である。今回は、まさに福岡における国交正常化60年の「生き証人」として活動してこられた村井氏にインタビューを行った。

### ○福岡県日韓親善協会の成り立ち

山口：まずは、福岡県日韓親善協会の発足経緯について教えてください。

村井：1965年以前より、仕事を介して、後の浦項総合製鉄株式会社（現・ポスコ）に関わる人々など、韓国の方との付き合いがありました。日韓国交正常化をきっかけに、日韓議員連盟が発足し（1972年）、一般の国民を対象にした民間の親善団体を各県に作ることになりました。福岡の場合は、日本政府から瓦林潔氏（九州電力第3代会長）に会長就任の打診があり、七社会（九州電力・西部ガス・西日本鉄道など、福岡財界の主要企業7社による互助会）を中心に組織化されることになったのですが、当時は韓国とのパイプがないということで、当時瓦林会長の秘書だった鎌田迪貞さん（第6代九州電力会長）を通じて私に電話があり、（常任理事として）参加することになりました。

その後、1981年に日韓親善協会の第2代会長として安浪榮基さん（FBS福岡放送社長）が就任された際、副会長になることになりました。この時、安浪さんの秘書を務めていた平田正蔵さんが第3代会長になります。

山口：まさに創立時からのメンバーですね。また、村井さんは1977年7月の亀井光福岡県知事訪韓にも関わっておられます。

村井：当時韓国政府の高官だった李秉禧氏（民主共和党党務委員、韓日議員連盟幹事長）と会食していた時、日本の県知事の訪問を希望され、福岡県知事を推しました。私が亀井知事にお話ししたところ、「村井さん、行こう」となり、韓国から招聘状を頂いて訪韓が実現しました。文世光事件（1974年）の後ではありましたが、私も案内人として同行し、国立墓地訪問などを行いました。進藤一馬福岡市長も韓国にご案内しています。元々進藤市長が韓国との交流に強い関心があり、ソウルとのパイプを求めているのでお手伝いしました。

## ○福岡市と韓国との交流

山口：福岡市は韓国の中でも釜山市との交流のイメージが深いです。1989年には両都市間で行政協定都市交流のための協定書が交わされましたが、釜山市との交流が活発化した経緯はご存じですか。

村井：当時の韓国は、姉妹都市について「一国一都市」という決まりがあり、釜山市は既に下関市と姉妹都市関係を結んでいました（1976年10月11日提携）。したがって、当時の桑原敬一が金権万駐福岡総領事に何度（提携を）希望されても、わが国はこういう決まりがあるのでできない、馬山は福岡とやりたいと言っている、そことしなさいと（言った）。けれども、桑原市長はどうしても釜山が頭を離れない。そういったことで、桑原さんから私に会いたいと連絡があり、会いましたら、「何とかならんだらうか」ということでした。それで、駄目元ですが少し待ってくださいと言って韓国に行きました。

当時は、大統領府秘書官から国会議員になった金キルボン国会議員に親しかったので話をしました。そうすると、「村井さん、その話はなかなか無理だな」ということでした。けれども、とにかく何も日本側だけ、あるいは福岡市だけにいいということではなく、必ず釜山のためにもなる。これは絶対両国のため、両都市のためになるので、そうした次元でひとつ考えてくれませんかということで、「分かりました」と。

そういったことから、当時の安相英釜山市長と3人で3回ぐらい会いましたか。結局韓国側に知恵を出してくれと僕が執拗に言ったら、韓国側が考えてくれたのが、釜山と福岡市が行政交流合議書に合議書調印するということでした。内容は、姉妹都市とほぼ変わらないような内容にするということでした。福岡市の市役所の人間が釜山の市役所に2年なら2年行く、釜山の市役所の方が福岡の市役所に2年来る、そうした人事交流からスタートしました。そして福岡の吉田宏氏が市長になってから、ちょうどタイミング的に韓国は「一国一都市」というタガが外れたのです（2003年）。そこで姉妹都市締結をまた新たに行ったという経緯が、福岡と釜山の関係にはあります。

山口：なるほど。今でこそ福岡は、「アジアのゲートウェイ」という言葉をよく使っていますが、福岡市が韓国を交流相手として意識してきたのはいつ頃からなのでしょう。

村井：やはり、それは進藤市長の時からです。進藤市長から、一層ぐっと進んだのが桑原市長です。それから山崎広太郎市長になり、吉田宏市長になり、そして今の高島市長になっているわけです。今の市長は、あまり韓国とそうした関係を深めようという意識は薄いですが、そう言いながらも福岡市のいろいろな団体が、今度は自分が市長選挙に出る時は応援してもらわなければならない立場ですので、そういった方たちが、結局非常に釜山と関係を深めている。福岡県は慶尚南道議会とも姉妹関係を持っています。

実は今年の3月に県会議議長などと一緒に行った時には、ワンヘルス（人、動物、生態系の健康バランスを包括的に保つアプローチのこと）の合議書の調印をしました。藏内勇夫福岡県会議議員は、全国の県会議議長会の会長にもなった方ですが、日本の獣医師会の会長やアジア獣医師会の会長も務めました。韓国の獣

医師会の許ジュヒョン会長との関係が非常に密になり、藏内会長の後にアジア獣医師会の会長になりました。そういった関係もあり、獣医師会も韓国とは非常に関係を深めています。

山口：進藤市長の代から韓国との交流を意識し始めたというのは、何かきっかけがあったのでしょうか。かなり早い段階からでしょうか。

村井：はい。ご承知か知りませんが、進藤一馬市長は玄洋社の最後の社長です。そのため、巢鴨（拘置所）に入っていたのです。その時に日本船舶振興会の方と一緒に部屋だったらしいです。

山口：それでは、いわゆるアジア主義的なところから韓国への意識を持たれていたのでしょうか。

村井：進藤市長は玄洋社最後の社長でしたが、この方のお父さん（進藤喜平太）は、頭山満と一緒にやはり玄洋社でした。市長室に行くと、孫文が書いた「正道」という書があったのです。私が「孫文先生の書が市長室にあるということは、福岡市も大変なお宝を持っていますね」と言うと、「いや村井さん、それは私個人の物です。個人の物だが正しい道とあるので、自分の市長室に飾っています。これは市の物ではなく、私の物です」と言われて、そうですかと。自分が小学校5年の時に、自分の自宅に孫文先生が来られたことがあるそうです。そのため、自分は孫文先生のごことはよく記憶していると、そういったことも言われました。そのため、やはり韓国とは親しくしなければいけない、戦前の植民地に対する贖罪というのがあったのではないのでしょうか。

山口：時系列が少し前後してしまいますが、1988年のソウル五輪の頃の福岡県日韓親善協会の活動はどうでしょうか。

村井：あの時は、JR九州が国鉄から民営化されて間もなくでした。その時は、JR九州も「ジョイロード」という旅行部門を持って、何とか日本人たちが好きな、例えば柔道、水泳などの種目のチケットを1枚ずつプレミアムとして商品に付けたいので、何とかそれが手に入らないかということもあり、私が100枚近くJR九州に取ってあげました。最終的に何人行ったかは知りませんが、ソウルオリンピックの時には、やはり韓国にはかなり当時から目が向き始めました。

オリンピックの2年前、1986年にアジア大会がありましたので。その時は長崎の高田勇知事も、アジア大会が終わった直後に私は案内したことがあります。

## ○日本の中の九州、九州の中の福岡

山口：ほかの九州の日韓親善協会との関わりなどは何かありますか。

村井：大体の各県には一応日韓親善協会ができています。ただ、活発にやっているかどうかということになると、福岡ほどのものはどこもないという感じです。それと、九州の各県にある親善協会の連合会のようなもの、その会長は福岡県日韓親善協会の会長が務めていて、全国の中央会の副会長になっているというスタイルです。

山口：九州外の地域などとの交流や協会同士の関わりはいかがでしょうか。

村井：それは、あまりありません。例えば中央会主催で何かやるなど、今回も日韓外交正常化60年についての祝賀会は、大阪のホテルニューオータニでやりました。その時は全国の親善協会の役員が来て、韓国からもそれなりの国会議員たちがお見えになりました。日頃は日本国内における親善協会同士の横の連絡はさほどありません。

山口：約50年続けてこられる中で、日本のほかの地域に比べ、日韓交流において九州ならではの特徴や強みはどういったところにあると考えていますか。

村井：それは、一つには距離的なこともあると思います。歴史的なものを振り返っても、やはり福岡と韓国の場合は、いろいろほかの地域よりもあるのではないかと思います。もう一つは、やはり何かしら肌が合うのではないのでしょうか。もう一つは、これが非常に大事な部分ですが、福岡県の日韓親善協会は、七社会がこぞって参加してくれており、ほとんど役員クラスが親善協会の役員になってくれています。福岡の七社会は非常に仲がいいです。そうした内、外、韓国との関係、国内における日韓親善協会の組織的な融和、そういったことが非常にうまくいっている。したがって、両面あると思います。

ビートルがある頃は、うちの会社にとにかく2カ月に一回ぐらい買い物や食べ物を食べに釜山に行っている子がいました。うちの社員旅行なども釜山やソウルに行きました。もちろんシンガポールなどいろいろ行っていました。やはり韓国ではみんな食べ物非常に肌に合いますね。そのため、韓国で食べたい、あれ食べたい、これ食べたいというようなことは非常に多いです。

## ○韓国現代史を見つめて

山口：これまでの60年間、日韓関係では色々な出来事がありました。特に印象的だった韓国の人物や出来事はありましたか？

村井：許和平という方はご存じですか。この方は、全斗煥大統領の時の青瓦台首席政務秘書官で、本当に韓国ではナンバー2と言われるぐらいの実力者でした。人間性も本当にいい方で、今、韓国未来財団の理事長をされています。この方は、私のところに自分のスタッフを8人連れてこられて福岡で一緒に会食にご招待したり、私が向こうに行くと、お互いスケジュールが合えば、必ずと言っていいほど食事したりするような関係です。この方も陸軍の将軍ですが。

また、金徳龍さんという方も、金泳三大統領の野党の時から秘書をしていました。この方はソウル大学卒業で、なかなかの人物で、この方が初めて政界に出てトップ当選した時は、2番と倍半分の差の票が集まりました。ものすごく人気です。この方は1期生で初めて当選したのに、アメリカのペンタゴンが1カ月間全部無料でアメリカに招待しました。それに行く前に福岡に来られて、原鶴温泉で鵜飼いをしたり食事したりして、3日間おられました。金徳龍先生は金泳三大統領が就任した後、すぐ政務長官になりました。2回長官をされ、また院内総務もされました。

ただ、ちょうど金泳三大統領の時からが、いわゆる民政になったわけですね。そのため、金泳三大統領の時から、国会議事堂の前に国交のある国の代表を招待して大統領就任式をするというのが始まりました。私も大統領就任式に招待されて、ちょうどその席の横が金徳龍先生のお父さんだったのです。お父さんはもちろん

ん日本語がお上手でした。徳龍先生が言われていたからでしょう、「あなたは日本の村井さんですか」というようなことで、「どうせ徳龍先生は、すぐに長官になられますよ」と言っていたら、やはりすぐ長官になりました。

長官になられている時に私が行くと、大変忙しい中でも「一緒に昼飯でも食べましょう」といって、すぐ出てきました。今でもそうですが、韓国に行くと、許和平先生や金徳龍先生とは一緒に食事をするような関係です。向こうの方々も私よりずっと年長の方でしたので、だいぶ亡くなられた方も多いです。金徳龍は私より1つ上で82歳、韓国でいうと83歳でしょうか。

山口：特に印象的だった韓国の政治や社会の出来事はありますか。

村井：色々ありますが、やはり驚くように韓国の漢江の力、朴大統領時代の経済政策が実りました。その集大成が、やはりソウルオリンピックの開会式だったのではないのでしょうか。あの頃ちょうど宇宙からの写真、テレビカメラ、そういったものにちょうど私が映っていたらしいのです。私は大統領とはす向かいに座っていたのですが、その時映っていたらしいです。誰も知らないはずなのに、私が帰国したら、「村井さん、あなたはソウルオリンピックに行っていたでしょう」と言われるので、何で知っているのだろうかと思ったら、テレビで見たというものだから、へえと思いました。

やはりソウルオリンピックは非常に素晴らしいものでした。それから冬季オリンピックにも行きました。いろいろありました。青瓦台もみんながなかなか行けない時にたびたび行きましたし、向こうの財閥、産業、ソウル財閥や海兵隊、いろいろ友人というか、親しい人ができました。気持ちの上では、親韓派を少し乗り越えているかもしれません。

## ○国家間の交流、人と人の交流

山口：村井さんのお話を伺うと、色々な人との積み重ねや信頼ということを語られてきたのが印象的でした。韓国の方々とお付き合いしていく上では、植民地の歴史もあるし、言葉の違いや文化の違いもいろいろあると思うのですが、今まで気を付けられてきたこと、大事にされてきたことはどのようなところがありますか。

村井：私の気持ちの上で一番は、先祖がしたことではありますが、明治42年日韓併合ということの贖罪といえますか、そういったものはあります。例えば子孫は、財宝も遺産かもしれないが、先祖がご迷惑をかけた、そうしたものも負の遺産としてはやはり遺産ですので、両方遺産としては受け継がなければいけない。したがって、私たちの時代に起きたことではないけれども、しかし日本と韓国ということから言えば、それはやはり日本側が頭を低くして贖罪という気持ちで、それでやけに迎合するというのではなく、やはりお付き合いするというのは本当の意味の対等の気持ちが一番大事なことではないかと思いました。

やはり韓国の方にしてみると、日本の、あいつらの親や爺さんがという思いもどうかした時に出てくる可能性もあります。そのため、そうしたことを引き起こさない、引き起こさせないような、そういうお付き合いの仕方が基本的に最も大事な部分ではないかと思いました。私は、日本人だから好かんなど、逆に韓国に行って嫌な思いをしたということは、非常に幸いなことに、ありません。

山口：特に近年、2010年代途中から日韓関係はかなり悪い時期が続き、一昨年ぐらいからまた改善のきざしを見せていると思うのですが、最近の日韓関係はどう見ていましたか。

村井：さかのぼる話の前に少し申し上げますと、私は実は金泳三大統領から尹錫悦大統領まで、6名の大統領就任式に全部招待されています。今回の李在明大統領就任に際し、日本のメディアから、李大統領がもし大統領になったら、文在寅大統領の時のようにまた（関係が）元に戻ることはないでしょうかという質問を受けました。私は、野党の立場で選挙に立たれた時の発言は色々あるとしても、大統領にもしなれたら最初に考えなければならないのは国益なのだから、日本と仲が悪くなって韓国側が国益という意味で利益があるかといえば、それはないでしょう。日本も一緒です。仲良くすればお互い国益が生まれるわけだから、もし大統領に李大統領がなれたら、今までのような話は出てこないでしょうと言いました。基本的には、誰だって国家を預かれば、それは国家に利益をもたらすような、またできるだけ平和な国政というものを考えなければならないわけです。

また、こんな話があります。全斗煥大統領が就任した時、金鍾泌先生など親日派の国会議員も皆自宅軟禁などされたのです。当時の日本の日韓親善協会中央会会長は参議院議長をしていた安井謙さんでした。会長代行が、民社党の委員長だった春日一幸先生でした。この春日先生が、本当は一番両国のための関係づくりをされた大功労者なのです。春日先生は特に親しくて、福岡に来られると私の車で2泊3日ずっと一緒に、そういった関係でもありました。

この春日先生から、韓国の親日派の国会議員は全部拘束され、全斗煥大統領も軍人出身なので、日本とのパイプがないということを言われました。その時に一番問題になったのが、日本からの借款問題でした。最初は100億ドル借款ということでしたが、日本側はとんでもないということで、金額的には40億ドル借款ということで一応収まっています。それは、鈴木善幸内閣の時でした。鈴木善幸内閣がその問題を解決しないまま引退して、中曽根政権ができたわけです。

そういった時代だったのですが、春日先生から「村井君、東京まで来てくれないだろうか」と電話があったので行きました。料亭で、春日先生と佐世保から出ていた中村弘海という衆議院議員と、外務省出身だった近藤豊という衆議院議員3人に会いました。

春日先生が、「村井君、君は全斗煥大統領を知らないだろうか」と言われるので、「弟の全敬煥さんは知っている」と言うと、何とか繋いでくれないかという話になりました。つまり、韓国側は、40億ドル借款は丸々ODAでもらいたいということだったのですが、外務省としては、韓国は開発途上国ではないのでODAの対象国ではないため円での借款にしてもらわないと困るところ、韓国の政府担当者は全斗煥大統領に対してピリピリしており、なかなかうまく話が通らないというようなことで、大統領につないでくれというようなことでした。結局、外交部長官を外す形で、円での借款とODAを20億ドルずつという提案を進めたのですが、今度は外交部長官が、自分が外されているということでむくれたわけです。それで、ODAのほうを5,000万ドル増やして、円での借款を減らすということで折り合いを付けたわけです。

それで、中曽根総理が韓国に行くということになりました。全斗煥大統領はものすごく喜びました。彼は職業軍人で、中曽根総理も軍人ではないけれども主計少佐でしたので、軍人としての格差はあるけれども、一国の総理と一国の大統領と非常に話が実り、40億ドル借款の問題は解決したわけです。その時は東京とソウルを行き来して話し合い、何遍もきりきり舞いしました。成田空港までは国会の車で送ってくれますが、飛行機の切符賃も何も、こちらは一銭ももらっているわけではありません。そのため、家内は「韓国とのお付き合いがなかったなら、家のもう1軒ぐらい建っていましたよね」と言っていました。笑い話です。

後日、韓国政府から春日先生に大韓民国勲章、修交勲章光化章という勲章が出されました。安井さんと私は修交勲章崇礼章をもらいました。叙勲の式で韓国に行きましたが、その時に、韓国では、全敬煥氏は大統領の弟だからセマウルの会長をしているのではないかという見方が少しありました。それで、私はそのお二人と安井さん、春日さん、中村弘海さん、近藤さんたちと一緒に、全敬煥氏のセマウルの事務所に案内しま

した。テレビカメラも入り、韓国が勲章を出した日本の政治家が、弟のところを表敬したということで、全敬煥さんは非常に喜びました。

そうした、お互いに立て合うことがやはり人間のお付き合いの中では大事なことではないでしょうか。私が私がと言っている、何もできません。日本の平成天皇陛下が、わがご先祖には漢民族の血を頂いていると公式の場で言われたでしょう。他にも、福岡銀行の頭取をして会長をされた新木文雄さんが福岡に来た時、福岡銀行がソウルに事務所を開設する関係でお手伝いし、テープカットの時には一緒に行きました。その時に酒を飲んでいると、新木会長が「村井さん、私の先祖は朝鮮人です」と言うわけです。「なぜですか」と言うと、実は、うちは1,000年ぐらい前に、いわゆる宮大工として韓国から来ているというのです。

新木頭取のお父さんは日本銀行の総裁もして、アメリカの駐米大使もした名家の人です。そんな方がそういったことを大っぴらに言うという、それなりに高い立場の人でも親韓派はいるのです。したがって、結局そういった思いをすれば、いさかいなど本当は起こるはずがないわけです。やはり心の持ち方が全てを決めるのではないですか。

**山口：**ここしばらく「戦後最悪」と呼ばれた日韓関係ではありましたが、村井さんのこれまでのご経験も踏まえてご覧になると、逆に本来だったら起こる必要のないことが起こっていると見ておられたのでしょうか。

**村井：**それはそうです。徐々によくなっていっているのではないですか。それこそ言われている当時は、福岡から韓国に行く飛行機は、本当にジェット機に20～30人ぐらいしか乗っていませんでした。1980年代は教科書問題など色々ありましたが、あの頃は本当に悪かった。結局は両国ともお互いに行くなと言って、旅行なども制限しましたね。本当に最悪と言えば最悪でした。その後全斗煥大統領になりまして、1年間の通しビザが発給されることになりました。あれは私が九州で初めてもらいました。新聞まで載りましたよ。したがって、一回ビザをもらっておけば1年間何十回行っても構わないというあれでした。その後はノービザになりましたしね。

コロナの時は、RKBのソウル駐在の人がいて、奥さんも子供を連れて行っていました。奥さんの手術で日本に帰国した後、韓国に戻ろうとしたら、今度はビザが下りないというのです。それで、私の方に電話が来たので、何とかビザを下ろしてやってくれないかと総領事に話をしました。向こうに行っている福岡のメディアが、家族のことでいろいろ困っている、ここで総領事の決断でビザを下ろしてくれれば、結局その当人だけではなく、日本国内でこれはすごい大英断を韓国側がやってくれたと感謝しますよと。それが、結局両国の親善の積み重ねの大きな一つではないかと言ったら下ろしてくれました。それで、結局非常に喜びました。やはりそうしたことの積み重ねではないかと思います。

## ○今後の日韓関係、協会の展望について

**山口：**韓国や日本でも最近政権が新しく代わりました。今後の日韓関係をどう見ておられますか。

**村井：**私はもう悪くなることはないと思います。韓国は中国とは貿易の問題からすれば何とか仲良くしたいと思っています。しかし、日本もそうだけれども第一義的に考えるのは、韓国と日本が仲良くして、それをアメリカがサポートするという関係がしっかりしたものにならないければ、北東アジアの安定はないと思っています。大統領が代わっても、日韓関係を悪化させることが韓国においても得になることはないでしょう。どこの国も、やはりその国が豊かになる、平和であるということを望むはずですので。

山口：日韓はいまだに、例えば歴史認識問題や領土問題など抱えています。一方で九州は、まさに親善協会のように人の交流の積み重ねもたくさんあり、生活圏も重なっているというところもあると思うので、日韓関係は良いままですと個人的に思います。

村井：たとえば竹島／独島問題ですが、私はどう考えても韓国のものだと思っています。どちらも引かれぬということであれば、結局は海洋権の、国の海を支配する海洋権の問題であれば、お互い、両国仲良く、これを挟んで両国が、漁業は魚の背中に韓国の旗や日本の旗を付けているわけではなく、行き来しているわけですので、お互いに捕れるのではないかと。

また、地下資源の海底開発の問題があるとすれば、これはお互いに出資し合って採掘をして、採れたものはお互いイーブンで分けるという知恵ぐらい出せないのかと。自分のだと両国言うのではなく、仲良くそういったことをすれば、大きく地球という考え方をすれば、そのようなものはささいな話で、何でそんなに目くじら立てて言うかと、私は言っています。

山口：今年発足50年を迎えられた福岡県日韓親善協会ですが、今後の活動の展望についても伺いたいです。

村井：やはり地域の行政を巻き込むかですね。今、県や県議会は韓国との関わりをもっています。今度は、やはり各市ですね。福岡県の各市も、韓国のどこかと仲良く交流や姉妹関係が結べないかと考えているところは結構多いです。行政が前向きに進むと、必ず経済もついてきます。その時、どうしても企業だけで解決できない問題が生まれた時は、やはり行政のサポートがないと困るという思いになる可能性が高いです。したがって、行政と経済、政経一体で進むという状態になればなるほど、両国の関係は密になると思います。

以前、高島市長が一度釜山との姉妹関係をやめようかと言い出したと間接的に聞いたことがあります。しかし、かつて韓国との交流を進めた進藤市長、桑原市長時代に、福岡の将来像として取り組んできた都市開発が今現実になってきているのです。つまり、今の福岡市の都市圏というのは、今の市長が考えてやり始めたことではないのです。福岡の経済界、あるいは一般の人は非常に親韓派が多いです。これまでの時代の積み重ねを一挙に市長権限でどうにかしてはいけなく考えます。

山口：それは心強いお言葉です。今本当に若い世代も韓流が非常に人気で、韓国に往来する人口もますます増えている中で、福岡の存在感や、その中に日韓親善協会のご活動というのもますます重要になるのではないかと考えています。

村井：福岡は非常にちょうどいいぐらいの都市です。福岡日韓親善協会も、七社会が中心となって組織化され、盛り立てている。大阪や東京になると、あまりにも大き過ぎてまとまりがつかないのです。そのため、在日韓国人の民団の組織も大阪と東京はうまくいっていませんが、福岡は民団支部長とも非常に密接にしてきました。ただ、今の民団の県の組織自体は事務局が少し弱まっている印象を受けます。

韓国の場合、ソウルが首都圏ですが、福岡から近い釜山と昌原にも日韓親善協会があり、福岡日韓親善協会は慶尚南道の2つの協会と関係があるわけです。最近、ソウルにもパイプを持っておきたいということで、国全体とお付き合いするような雰囲気になってきています。それに、今度九州経済連合会は大田に行くので、経済団体の連合会の交流も始まります。今自治体同士でいえば、九州は韓国の道知事や釜山市長と交流があります。特に今 K-POP の爆発的な人気があるように、そうした裾野の若い人たちに交流が急速に広がり、親韓派、あるいは親日派が増えれば増えるほど、政治は必ずそちらの方を向いてしか

できません。この人たちを無視して政治だけがああだこうだ言うてみたところで、誰もついていきません。親善協会を作った意味はそこにあったわけです。裾野を広げる、そのことによって政治は動く。政治を動かすのは、結局は国民です。これは、親善協会を作ろうという発想が両国の国会議員連盟の中で生まれて、政府からその地域の力のある人のところに話が来て、具現化していった流れに繋がります。

山口：今の福岡は、釜山に限らずソウルや大田など、韓国の様々なカウンターパートにも目を向け始めているということですね。更に、人の交流が50年かけて本当に裾野に広がってきた成果を今見ているということですね。

村井：もちろん親善協会の力だけの話ではありませんが、そうした方向性が両国にあるので、そうなっているわけです。思いがなければ、なりません。私は好きだと言っても、向こうは嫌いという、それではもう話がまとまりません。やはり国であっても、相思相愛にならないとよい知恵も出ないでしょうし、気持ちも、人間はやはり気持ちではないですか。

山口：そうした意味でみれば、九州はやはりお互いに知っている方が色々繋がっている点が、東京などに比べて関係が密な点が強みですね。

村井：七社会のこともそうですが、福岡総領事館とも本当に皆親しくしています。総領事が公邸晩さん会に私たちを招待したり、日韓親善協会としてゴルフ会を年に1回か2回やったり、非常にうまくいっています。それこそ、文在寅大統領の時の総領事でも、野党大統領であったけれども、福岡の日韓親善協会や企業団体と韓国総領事館は非常にうまくいっていました。総領事館との関係で今まで悪かったという経緯はないですね。人間関係がうまくいっていれば、政府間の状況はあまり関係ありません。私たちは私たちという考え方です。

山口：本当に戦後日韓関係史の貴重な裏話をたくさん伺いました。私たち九州大学韓国研究センターも、まもなく設立30周年を迎えますが、福岡日韓親善協会様を始め、九州の様々な機関・団体とも協力しながら、九州における日韓交流をぜひ盛り上げていきたいと思っております。本日はお話どうもありがとうございました。

インタビュー日：2025年11月5日

場所：ムライケミカルパックス本社 応接室

## ② 初代センター長・石川捷治教授インタビュー

参加者：石川捷治 名誉教授（九州大学名誉教授・初代センター長）  
出水薫 教授（九州大学法学研究院・第7代センター長）

### □プロフィール

石川捷治（いしかわ しょうじ）1944年10月中国東北部・大連市に生まれ。1967年佐賀大学文理学部卒業、72年九州大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学。北九州大学法学部、九州大学法学部、久留米大学法学部で研究・教育に従事。九州大学法学部長、九州大学法学研究院長（初代）、九州大学韓国研究センター長（初代）、久留米大学附属図書館長などを歴任。20世紀の政治史、地域研究・平和研究を専門とする。

出水：2025年のセンター年報の特集は、前年がセンター25周年、今年が朝鮮植民地解放80周年と日韓国交正常化60周年の節目ということで、センターの過去を顧みつつ、現状、そして未来を展望するため、センター長経験者のみなさんと現センター長の私の対談や鼎談を掲載することになりました。そこで初代センター長である石川捷治先生と、こうして対談するということです。

センター設立の経緯や、この間のセンターの活動などは、九州大学100周年記念誌の中に、韓国研究センターに関する部分があり、事実関係に関しては、それなりに説明されています。そこで、この企画特集では、センター長経験者の先生方の「経験」や「実感」というものを踏まえ、進めて行きたいと考えています。

まず『百年史』に書かれていることですが、最初にかがきたいのは、センターが発足する経緯、金鍾泌（キム・ジョンピル）、当時の首相の九大での講演会から、センターをつくるというところの流れの中で、石川先生がどのようにお関わりになって、どのようにお感じになったのか、エピソード的にいくつか自由に話していただければありがたいのですが。

石川：僕はコリア研究者でもなければ、朝鮮半島との関連について特に詳しいわけでもなかったのですが、たまたま巡り合わせといますか。

出水：あの時は法学部長ですよ。

石川：そう。法学部長だった時に当時の総長杉岡洋一さんから、鹿児島で日韓首脳会談があるので、その帰路に金鍾泌さんがぜひ九大で講演をしたいという話があるけれども、どうでしょうか。

出水：意見を求められたのですよね。

石川：杉岡総長は、「反対する人をまず訪問する」をモットーにしているということで私のところへ。（本を見せる）

出水：それは杉岡先生のご著書ですよ。

石川：これは『常識を超える』という杉岡先生への聞き書きで、玉川孝道著で2010年に西日本新聞社から出版された本です。このなかの一章を使って、韓国研究センターについても書いています。杉岡先生の熱意と

考えがよく分かる本なのです。

その「反対する可能性の高い」？法学部長、すなわち私のところに杉岡総長がみえてこう切り出されたのです。法文系の大講義室に憲法の受講者を対象に、講演をしていただくというような構想なのです。なぜかというとな紛争が起こると管理的に大変だからと。

僕は「日韓条約」反対世代の一人ですので、金鍾泌さんが韓国政治に果たした役割については厳しい意見を持っていました。それで、個人的には金鍾泌さんの講演会には反対ですが、九大が一国の総理をお迎えするのは、そうしばしばあるわけではないので、やるからにはそんな小さな企画では駄目ですと。記念講堂で全学に公開し、九大フィルを入れて、やるべきだ。その自信がないならやめたほうがいと総長に申し上げたのです。

数日後総長から、あなたの案を全面的に取り入れるから、進行役になってもらえないかと。総長は整形外科医だから決断が早いのです。それで、僕は提案したものの、引っ込みがつかなくなって。全学的でやるのなら、法学部長および執行部の一員としての責任は果たしましょうということで引き受けました。

**出水：**改めて振り返ってみると、明らかに一国の、まさにおっしゃるように、一国の現役の首相がわざわざ指名して日本の大学で、しかも私もあそこには参加しましたがけれども、全部日本語でやりましたよね。

**石川：**そうです。

**出水：**それは絶対に韓国内的には政治的ナリスクがある。にもかかわらず全部日本語で直接学生たちに語りかける口調で行われていて。あれは当然のことながら金大中（キム・デジュン）大統領の許可がなければできないことです。なので、やはり小淵・金大中パートナーシップ宣言を受け、何らか日韓の社会的な相互交流を促進する上で一石を投じるというような位置付けで、恐らく大統領まで含めての何か構想の一部として行われたという気がします。

**石川：**多分そのとおりでしょう。僕は金鍾泌という風雪に耐えた政治家の肝の据わり方、迫力、醸し出す雰囲気は、実際に会ってみて感じました。九大関係者には歴史的なチャンスだったと思います。

実は心配もありました。最低でも生卵くらいは飛んでくるであろうと。韓国からの留学生もいろいろな人がいるので当然です。あとで生卵を用意してきたけれども、あの雰囲気ではね、という話も聞きました。僕は金鍾泌さんの講演、しかも韓国語ではなくて日本語で、通訳を入れる時間があったくない、直接気持ちが伝わらないと。何とかして若者に伝えたいという、その熱意、迫力を感じました。

僕は司会で、舞台の袖から見ていましたが、前から後ろに感動の波のようなものがガーッときて、また後ろから前に伝わってきました。初めての経験ですね。

**出水：**タイミング的には、非常に巡り合わせというか、これはやはり四半世紀が過ぎてみて現時点から振り返ると、ものすごく九大にとって貴重だったなと思います。今、申し上げたように、金鍾泌氏が金大中氏と組んで、金大中大統領の下での首相であるということも含めて、やはり金鍾泌氏が単に講演するという話ではないという文脈が生まれましたよね。

また、96年にOECDに加盟し、「先進国」化したにもかかわらず、97年には例の「IMF危機」に見舞われ、まさにIMF危機を克服する過程で、日韓首脳会談が行われ、かつ九大で講演を行うと。つまり韓国側がある種の国難のさなかにあって、九大を訪問し、そしてそこで日本の学生に、次世代に直接語りかけたいと

というようなことをおっしゃった。私もあの会場にいて、先生と同様に感じました。記念講堂のあの広い空間が、たった1人の、老人というのはあれですけども、その言葉と気迫にのまれている状態ですよ。

石川：そう。まさに老獺と言っているのですけれども、使命感と熱意を感じました。

その時に触れられたのですが、韓国の建国時の自分の先輩たち、例えば日韓国交正常化の第7次代表の金東祚（キム・ドンジョ）さん、外交官で外務大臣・駐米大使もされた方をはじめ、多く九大の卒業生たちが活躍したように、ソウル大などが、まだ人材を養成できない前の建国時の政界、経済界、学界では、九州大学が「恩人」なのです、と言われたのです。

それは歴史的事実で、朝鮮半島と九州大学には、負の面も背景に持ちながら、長い歴史があります。これは、僕が九大韓国同窓会などを直接訪れた時に、よくぞ九大が韓国の卒業生に目を向けてくれたと歓迎していただいたことを思い出します。

そういう歴史の重みが、金鍾泌さんの講演と。それから後の、九州大学に韓国研究の拠点をつくろうという、背後に流れていると感じましたね。

出水：歴史的文脈といますか。

石川：歴史的なものをもう一回、思い起こす必要があると思います。四半世紀前ですけども。

出水：確かに戦前以来、日本で4番目に設立された大学として、また後発の大学であるが故に、植民地との奇妙なというか、関係が強くあるという文脈も含め、しかし冷戦が終わり、韓国がいわゆる先進国化した時点で、その文脈がある種の前向きというか、肯定的というか、そういった効果につながっていくというのは、それ自体がやはり歴史の面白みというか、奇妙な巡り合わせですよ。

石川：僕が生まれたのは1944年だから戦前と戦後のはざまに生まれた人間で、何かの時は最後であったり、最初であったりするのです。そういうのはざまに生きている、つなぎ目のような時にたまたま法学部長で、その時に出会った韓国研究センターの設立というのも一つの巡り合わせで、面白いと思います。

出水：その話に至ったところで、韓国研究センターがつくられる経緯、これも『百年史』には書いてあるのですが、もう少し生々しいというか、当事者としていろいろと体験なさったり、経験なさったりしたことも交えながら、先生がその設立の過程でどのように関わったか、あるいは初代センター長になった経緯はどのような感じなのかということをお教えいただければ。

石川：それもひょんなことで、金鍾泌さんの力が大きかったと思います。また杉岡総長、徐賢燮（ソ・ヒョンソプ）駐福岡韓国総領事、韓国の同窓会OBの後押しや、九大の中の日韓関係を何とかしたいという、そういう人たちの人間ドラマが流れをつくったのだと思います。

まず講演会で、杉岡さんが、想定よりもよいものができたと思われたのでしょうか。石川さん、ここで引けませんよと強調されました。金鍾泌さんの肝いりもあって、韓国の国際交流…。

出水：財団ですね。Korean Foundation（以下KF）です。

石川：5年間に100万ドルの支援を行いたいという、ありがたい申し出があつて。まず学内措置として「韓国研究センター」を建てようとなつた。総長が私にセンター長をやってくれと。私は専門ではないからと断わつたら、杉岡さんは韓国に関わる研究者はいるけれども、誰かがなつたら誰かが反発して、うまくいかない、全く関係ないあなたのほうがスムーズにやれると説得されて、もう仕方ないと。しかし、その後、日韓関係はまだ好転する前の時期だから、いろいろありました。

そういう学内措置でセンター長になつた時に、外務省と文科省の局長からじかに研究室に電話があつて、これは内密にお願いしたいのですが、日韓関係を何とか改善したいので、政府としては3つのことを考えている。1つ目は、NHKのハンゲル講座の強化。2番目に、東京大学に大学院の 코리아研究の課程を新設すること。3番目に、九州大学に研究機関を置きたいということ。ぜひセンター長の力を借りたいのだということでした。大げさに言えば「国策」の一つに選ばれたのです。

九大本部は、文科省への韓国研究センターの省令化の概算要求というのは全体要求の8番目くらいの順位で、全く通らないと思っている、それを通すからというわけです。

出水：文科省と外務省が応援してくれたわけですね。

石川：文科省と外務省が話し合つて局長が僕に電話をかけてきたわけです。僕が言ったのは、研究機関としてきっちりやるためには定員を付けてもらわなければ動きませんよと。当時は文科省の関係で定員が付くということは絶対にない時代だったので。

出水：あり得ない話ですよ。

石川：そうです。だから、詳細は省きますが、いろいろとあつて、最終的に僕が文科省に交渉に行ったら、交渉する部屋がないと言ひ出したのです。そしたら、某所から声が掛かつて。前の科学技術庁長官室、大臣室が空いているというので、前大臣室で僕は担当者と向かい合つたのです。

出水：それは今、簡単に整理すると、杉岡総長のある種、熱意もあつて、学内措置としてまず99年につくられると。そこで石川先生がセンター長に就任なさつて、今のお話はたぶん2000年代に入つてからの。

石川：2002年に実現するのです。

出水：そうですね。文科省になっているから2000年以降なのですが、省令施設になる時にそういった外務省と文科省が連携して、九大の韓セをバックアップして省令施設にするということに前向きだったというお話ですよ。

石川：そういうことです。しかし、表面的にはこちら側が要求している交渉事項ですので、文科省側はたくさんやかましいことを言うわけです。それで、僕は、それなら今年は駄目ということですね、とカマをかけたのです。そしたら向こうが慌てて、センター長、これは下りてもらふわけにはいかないのだと言ひ出したのです。それなら申し訳ないけれども、少し示唆してもらえないかと言つたら、1は何、2は何と言ひ出しました。ではそれで出しますと言つたら、分かりましたということで、お膳立てができたわけです。それで、当時としては異例の定員を含めて、ご承知のような内容が実現したということなのです。

出水：ということは、そこでポストを得てから、たぶん松原先生が専任教員に就任なさるのですよね。

石川：そうそう。松原さんはセンター側の選考委員の一人としてうずうずしているわけです。だから、松原さん、選考委員はやめて候補者になったらと言ったら、そういうことはできますかねと。できるも何も、先例がないのですからと。彼がそこで決断してくれました。僕は松原教授にはものすごく感謝しているのです。韓国研究センターに大きな貢献をしてくださいました。その仕事ぶりたるや驚嘆に値します。僕は面と向かって言っていないので、この機会に改めて感謝していますと言いたい。

出水：今の九大の中では、執行部も含め、松原先生への評価は否定的です。少し困った人という話になっているので、この対談の中で石川先生の口から評価していただくと非常にありがたいですね。

石川：松原先生は韓セの恩人だと思いますよ。彼の突破力というか、少々アクの強いところも含め、彼がいなければ韓セはうまくいっていませんよ。

出水：この特集のもう一つの企画であるセンター長経験者3人の鼎談の時にも、深川先生と私でそういった話になりました。いろいろプラスマイナスはあるけれども、やはり松原先生あつての韓セの基礎づくりだったというところは意見が一致しています。

石川：僕も同感です。大いにぶつかったこともあるのですがね。

出水：初期、今、思い起こせば、何回か会議をやったのですよね。後に東京大学に移られた六反田先生や、稲葉先生、松原先生は当然ですし、濱田先生もおられ、そして深川先生と私くらいで集まって、まだ省令施設になる前の段階ではそういったメンバーでいろいろとやっていたのですよね。ところが現役では、もう私しか残っていませんので。

石川：そうなのですか。当時は若手でしたね。

出水：そうです。その時は私が一番若かったのです。一番若かったのですが、今はもう私しか現役では九大に残っていませんので。

石川：それが四半世紀という意味でしょうね。

出水：ですので世代交代を、ここできちんとバトンを渡せないと、センターの持続可能性も問われると考えています。

それで、やはりこの四半世紀、日韓の政府間関係だけではなくて、さまざまな関係が変わりました。まだセンターができて2000年代の頭くらいまでは、それほど対等のような感じでも、水平のような感じでもなく、どこかで以前の関係性を引きずり、しか、2002年のワールドカップ共催くらいから徐々に文化的なものや社会的な交流もさらに進化するというところがあったと思います。箱崎キャンパスにセンターがあった時は、今の伊都キャンパスと違って、文系から中央図書館に向かう途中の場所にあり、開放的で学生の皆さんのたまり場になっていましたよね。

石川：そうそう。

出水：あの2002年のワールドカップの時の印象や思い出はありますか。

石川：今だとパブリックビューイングは当たり前ですが、あの時代、大スクリーンに中継を映してというのは珍しかった。日韓の学生がともに応援して。韓国的女子学生がチヂミをつくってきて、それを配ったりした。いろいろなドラマが生まれました、面白かったのは、韓国とドイツの試合も中継したのですが、100人以上集まっている中でドイツからの留学生は2人です。そのたった2人がドイツの応援をするのです。あまり力強そうな学生には見えなかった一人が、応援の中では100人を相手に、ドイッチェラント・ユーパー・アーレスと声を張り上げました。もう1人は、少し抑えて、抑えてと必死でしたが、ドイツ人もすごいと言う話になりました。これは笑い話ですけども。

出水：センターで観戦会やったわけですね。今で言うパブリックビューイング。

石川：そうそう。韓国人留学生の女子学生の応援もすごかった。みんな打ち解けて、ドイツチームの健闘をたたえたりして、最後は全員肩を組んで。それが日韓ワールドカップの果たした効果だったのではないかと思います。

センター、当時図書などがそれほどあったわけではないが、たまり場的な休憩場所として利用され、韓国に対する興味を持ったり、親しみを持ったりする一つのサロンになりました。今、どうか分かりませんが。

出水：今はセンターの位置関係で難しいのですよね。

石川：センターが、そういう機能を果たせればよいなと思います。

出水：初期は韓国研究センターが、学生の皆さんをコリアンスタディーズに巻き込んでいくというような工夫、語学研修もやっていたし、いろいろな、それこそ松原先生が汗をかいてつくった日韓の学生交流のようなプログラムもありました。学生向けのさまざまな催しを提供する機会も、当時はたくさんありましたよね。

石川：ありましたね。

出水：あの後、そういうことをしなくてもよいほど怒涛のように、2010年代以降は、放っておいても裾野が広がっていった感があります。ただ、90年代から2000年代の頃にはまだまだ今のような雰囲気ではなかったから、センターが学生の皆さん向けにやっていたことは大事だったなと思いますね。

石川：僕は福岡韓国商工会議所婦人部のバザーにセンター長として行ったことがあるのですが、在日コリアンの婦人から、今まで在日という引け目に感じていたけれども、うれしいことがあったのよ、大学生の娘が、韓国人に生まれてよかったと言った、『冬ソナ』ブームからその後の韓国に対する敬意や、文化的な素晴らしさに目覚めた中での話で、娘からその話を聞いて、私は胸がスーッとしたり涙ながらに、話してくれました。

表現が適切かどうかはともかくとして、韓国における「市民革命」の進展とともに、韓国の研究者も、市

民も自信を持ってきました。例えば、韓国における民衆史研究において、戦前の日本人は視野に入っていなかったわけです。韓国の民衆社会のなかの日本人については、植民地支配の問題としても解明の必要があるはずでした。それが日本人も対象に入れなければ全体像が見えてこないという問題提起が韓国の研究者から出て、以降、当たり前ようになってきました。

このような問題意識の変化とともに共同研究への動きが出てきました。その一端に触れることができたのをうれしく思います。

出水：やはり日韓の関係自体が、多元的で、多面的で、水平で、対等であるというようなものに急速に変わっていく、その期間をまさにカバーする形で韓国研究センター自体の歴史があるような、そういう位置関係ですよね。

石川：そういうことだと思います。

出水：だから、やはり日韓双方の関係性の変化、非常に大きな、しかも短期間の変化に伴走する形でセンターが活動してきたというのは、いいことですし、センターもその恩恵を被っている側面が多々あると思います。今でも継続しているのですが、例の世界韓国研究コンソーシアム、あれも松原先生が本当に馬力を出してくださった。あれをつくるために私たち3人で、本当に足掛け2年くらい世界中を出張して回りましたよね。あれほど海外出張した時期はないと自分でも顧みて思うのですが、ヨーロッパから、北米から、ぐるっと回りましたよね。

石川：本当によく回りましたね。

出水：やはりあれは成果として非常に大きくて、今も続いていますけれども、依然として日本では九大の韓国研究センターしか加盟していないので、世界における認知度を高めるための回路としてはずっと機能しているのです。

石川：日本の研究機関ももう少し開放的であってもいいと思います。それと全てが東京経由というのではなくて、九州・福岡が、地理的・歴史的関係から、世界のコリアンスタディーズのネットワーク拠点の一つになっているのは大切であり、必然でもあると思っています。

出水：そういった形で、まさに先生がセンター長をなさっておられた時におおむね現在の韓国研究センターの礎というか、基礎となる部分がつくられたと思います。もちろん先生もご退職になってそれなりの時間がたちましたが、外部から見ている、今の韓国研究センターについてはいかがですか。それほど露出度が高いわけではないので、ご存じない点多々あると思いますけれども、率直に今の韓セの印象のようなことを教えてください。

石川：その後、僕は久留米大学に移って、外から眺めたのですが、共同研究などはよくやっていると思うし、市民向けのものもそれなりによくやっていると思います。

出水：そうですか。

石川：さらに、九大にセンターがあると分かるような機会がもっとあってもいいと思います。市民的な、日韓・日朝の交流もいろいろありますが、センターが肩ひじを張らないような形で協力し、市民、研究者が気軽に集まれるセンターであってほしいと思います。

出水：それなりに、ここ2年くらいは映画やドラマ、音楽なども公開でやっているのですが、それほど定期的にやっているわけではないので、知名度は確かになかなか広がらないところがあると思います。

ここで韓国研究センターの歴史を離れ、現状の日韓関係についてどう考えるかということ、それに対して韓国研究センターがどのように関わっていいのか。あるいはそういった現状において将来を展望しつつ、韓国研究センターができる貢献とは何なのかということについて、お考えがあれば少し伺いたいのですが。

石川：若い人にとっての韓国、そして朝鮮半島への興味や感じ方は変化していると思います。音楽や、映画や、アニメなど文化的なものにはほとんど垣根のない関係になった、いうならば国の視点から個人の視点へと移行したといえます。しかし近現代史を見ると、日本と朝鮮半島の在り方は「合わせ鏡」といってよいほど直接の影響があり、また未来を決めていく大きな要因だと思います。僕が学生だった頃から見たら、韓国も北の共和国の在り方も全く違ってきています。日中韓だけでなく東アジアにおいて人々の相互訪問が急激に増加しています。市民として同じ歴史的な土台の中で共存しています。

韓国は「市民革命」が進行中ですので、その先進的な部分に学ぶ必要があります。私たちの眼前には、日本と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との関係をいかに正常化していくのか、朝鮮半島の平和と非核化、さらに北東アジアの平和体制の構築を包括的にどう進めるのかというテーマがあります。国際社会の一員としてどう考えていくのか、少し視野が狭くなってきて、すべてアメリカを通じて見ているような世界のみかたでは行き詰まると思います。韓国研究センターも朝鮮半島をもう一度東アジアのなかで位置づけ直して研究活動に頑張ってもらいたいと思います。

研究機関としては、資料の蓄積が重要です。森田文庫など、いくつかの文庫を有していますが、現在の価値がどうかではなくて、50年、100年後には朝鮮半島との関連では九大にはこういう資料があるということになるので、資料を充実していただきたいと思います。

研究に関しては、細かい研究も大事ですが、市民に還元できるような、市民どうしの関係を明らかにする研究にも、目配りをしていただきたいと思います。

出水：まさに今、内向きというか、国境の内側に立てこもろうとしているという傾向が世界的に強まっているわけですが、やはりもう少し広い文脈の中で相互に学び合ったり、相互に同じものについて共同して取り組んだりというようなことを展開していかないと、本当に閉塞状況の中に陥りそうです。そういった観点から、広く市民の皆さんも巻き込みながら展開できるような、これまでになかったようなタイプの研究活動を後押しできるようなセンターになればよいという話ですね。

石川：センターができた経緯は九大の長い歴史の中ででき、さまざまな人間ドラマがあり、現在に至っています。その原点を思い出しながら新しい状況に対応していく、そういうセンターであってほしいなと思います。

対談開催日：2025年11月14日（金）

場所：オンライン

### ③ 歴代センター長鼎談

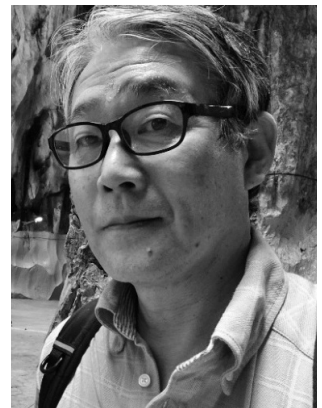
参加者：深川博史 教授（東海大学・第5代センター長）

元兼正浩 教授（九州大学人間環境学研究院・第6代センター長）

出水薫 教授（九州大学法学研究院・第7代センター長）

#### □プロフィール

深川博史（ふかがわ ひろし）九州大学・経済学部卒・大学院修了。博士（経済学）、九州大学名誉教授、東海大学教授。1987年九州大学助手、1988年助教授、2003年教授、2018年韓国研究センター長兼任（2022年まで）、2022年九州大学教授退任、東海大学教授就任。



#### □プロフィール

元兼正浩（もとかね まさひろ）九州大学人間環境学研究院・教育学部教授 博士（教育学）。日本教育学会理事、日本教育経営学会会長、九州教育学会会長、九州教育経営学会会長、2024年9月～国立公州大学校師範大学、国立ソウル大学、成均館大学にて客員研究員、九州大学韓国研究センター第6代センター長などを歴任。

出水：本日は、お時間を割いてくださってありがとうございます。まず簡単に確認ですが、ご承知のように今年には植民地解放80周年であり、日韓外交正常化60周年で、いろいろと周年事業が行われています。昨年、韓国研究センターは四半世紀を経ましたので、改めて年報で、過去を振り返り、積み上げた実績を踏まえ、今後コリアンスタディーズを促進する共同研究機関として、センターがどう進んでいくのかを考える材料という位置付けで、今回、私ども直近の3人のセンター長経験者が集まって鼎談（ていだん）する企画にしました。

冒頭、自己紹介も兼ねて、深川先生、元兼先生の順番で、ご自身のコリアンスタディーズへの関わりとセンター長になった経緯を簡単に説明していただいて、その後、本格的に過去を振り返り、実績を確認し、展望を語るという順番でやっていきたいと思います。

まず、深川先生お願いできますか。

深川：まず、韓国研究への関わりは学生時代に韓国旅行中に向こうの学生と歴史をめぐる議激論を交わしたことがきっかけで韓国に関心を持つようになり韓国語を学びました。私は経済学部で農業政策のゼミにいたのですが、大学院進学後、韓国農業について植民地の歴史から研究を始めて、修士論文はそれで書きました。その後、大学の教員になってからもずっと、韓国の農業経済分野の研究を続けています。農業以外の浦項製鉄所など技術分野の研究もしましたが、韓国研究という点では一貫しています。

それから、センター長になった経緯ですが、そもそもセンターに関わり出したのが、出水先生と同じ2000

年前後のセンター創設時期です。途中の2010年代中盤の4年間は全く関与していなかったのですが、それ以外はずっと何らかの形で関わってきました。私がセンター長になる時は、前のセンター長がお辞めになる時期で、元兼先生に推薦いただいてセンター長に選任されたという経緯があります。

出水：ありがとうございます。では、元兼先生、同じように、ごく簡潔に自己紹介も兼ねて、よろしくお願ひします。

元兼：はい。九大では人間環境学研究院、教育学部に所属しています元兼と申します。私の韓国との関わり、またはこのセンターとの関わりにつきましては、以前、2019年に発刊されたセンター年報の19号で、富樫助教にインタビューをいただき、そこでかなり詳しくお話ししていますのでそちらを併せてご覧いただければと思います。

私が初めて訪韓したのは1988年のオリンピック直前の夏でした。ただ、私自身はその後も韓国を対象にコリアンスタディーズ研究はしてこなかったのですが、たまたま九州大学に帰還することになって、九大と韓国とのつながりの強さと深さは実感していました。特に教育学部に第2代センター長の稲葉先生がいらっしゃいましたので、そのつながりで、人間環境学研究院教育システム専攻に韓国の官僚派遣で修士号や博士号を取りにこられているキャリアの方がいらっしゃって、私は教育行政学の研究をしていましたので、韓国の教育行政を知る上で非常に深い、良い機会を頂いており、それを何とか維持したいと考えておりました。

それで稲葉先生が退任されるのと入れ替わりのような形で、多分韓国研究プロパーではない者としては初めての専門委員会委員だったと思うのですが、当時のセンターのメンバーとして加えていただいたのが始まりです。

その後、つかず離れずの状態ですべてセンターにはずっと関わり続けていました。ちょうど出水先生や深川先生がご不在の期間も関わっており、たまたまその時期に副センター長を拝命したこともあります。深川先生が退任されるタイミングでは、本来、初期メンバーの出水先生がセンター長をされるべきところだったと思うのですが、別の業務の関係がありましたので、私がつなぎ役として第6代のセンター長を拝命したという経緯になります。

出水：ありがとうございます。韓国研究センターは、単に大韓民国だけでなく、コリアンスタディーということで、韓国語・朝鮮語圏、朝鮮半島に淵源（えんげん）を持つような諸現象を全て網羅するということになります。他方で、端的に言えば九大が朝鮮半島とも歴史的につながりが深いということの延長線上で、私たちみんな関わりを持つことになったとも言えると思います。

次に、それぞれの先生方がセンター長であった時に、どういう懸案がセンターにあって、どういう対応をなさったのか。とりわけコリアンスタディーズの研究を促進する機関としての実績として見た場合、センター長の時期にどのようなことが指摘できるのか、お伺いできればと思っています。いかがでしょうか。

深川：私がセンター長を引き受けたのは2018年からの4年間でした。18年4月にセンター長に就任して早々、5月に箱崎から伊都キャンパスに移転がありました。その移転については、私が久々にセンターに復帰したということもあり、状況が分かっていませんでした。そこで3月頃に、国際部の鶴田さんと前のセンター長から説明を受けました。

当初は伊都キャンパスの比文の建物に入る予定が、調整がつかず、学生のサークル棟だった建物に入るということになったという説明でした。その際に、センターの概況とセンター長の職掌、職務内容についても説明が

ありました。移転は、准教授の崔先生や事務方の岡本さんなどにお手伝い頂いて、無事終了しました。大変だったと思います。移転は私が状況を把握できないままに終わっていました。

移転後に大変だったのは書庫の整理です。蔵書がものすごいボックスの量で持ち込まれていたのですけれども、書物は箱詰め状態で配架されていませんでした。これを箱から出して一冊ずつ配架していく必要がありました。記憶にあるのは、多分6人か7人のセンター関係者がボランティアで箱出しと配架作業を行ったことです。私、崔先生、岡本さん、副センター長の波瀾先生も参加して、みなで作業服姿、ジャージ姿になって、汗を流しながら整理配架作業を行ったのが、良い思い出として残っています。

ただ、残念ながら、その後、センター書庫の蔵書は公開が遅れて、広く活用されないままでした。あの時、一生懸命作業整理したのは何のためだったのだろうかという思いです。

**出水：**せっかくの機会なので補足すると、深川先生をはじめとした皆様のご貢献により無事に移転された資料群は、既に書籍に関しては重複なども整理して、基本的に韓国研究センターから中央図書館に移管しています。なお「文庫」の名前が付いているものについては、どの文庫であったのかということが、九大図書館の書誌情報として明示されています。ですので、書籍に関しては活用できる状況になっているので、ご安心ください。

**深川：**ご説明ありがとうございます。せっかくの蔵書を研究用に活用できないと、保存している意味がないので、それは今、お話し頂いた通り、活用できる状況になっていて、大変良かったと思います。

それに関連しまして、私がセンター長を引き受けた時は既に多くのことが決まっており、人員の配置や、研究の方向も含めて裁量の余地がありませんでした。2010年代前半頃までは現代研究が中心で、出水先生や私も参加して、様々なシンポジウムを開催していましたが、私が復帰した頃には様変わりしていて、非常に戸惑ったのを憶えています。それで、4年間のうち前半は何とかコアファンデーション（以下、KFと略す）の支援を受けながら成果を出そうと頑張っていたのですけれども…。

**出水：**ということは、かなり研究分野が特定の分野に偏っていたのであれば、KFへの申請や、そこで受ける助成についても、特定の分野に限定したものを申請していたのですか。

**深川：**違います。センター委員会の前に、今の研究戦略会議のような、センター教員の会議を開いていたのですけれども、その際に、KFから支援を受けることについて、議論になりました。そのために、まずはKFの支援を受けられるような状況に持っていくことが大変でした。

**出水：**それはにわかに信じ難いですね。私たちのように創設時から関わっている者からすると、このセンターは、KFの支援なくして立ち上げることはできなかったと思うのですけれども。どういう理由で難色が示されていたのですか。

**深川：**特定国からの資金的な支援を受けることは、研究の内容に影響が及ぶのではということが理由だったと思います。

**出水：**なるほど。

深川：今、お話しされた、創設時からKFの支援を受けていることが前提なのですが、議論になりましたので、KFの支援を受けることを納得頂くのがまずは大変な作業でした。それが、私がセンター長を引き受けた際の状況でした。

出水：では、センター長に就任なさった時は、KFからの資金は細っている状態だったのですか。

深川：いや、来ていたと思いますけれども、KFとの関係は良好とは言えませんでした。そのまま放置しておけば、多分KFの支援は細っていた可能性があります。そこを何とかKFの支援を持続させる線路を敷かなければいけないということが、大変だったと記憶しています。

出水：そういう状態であれば、合意形成そのものが主な仕事になり、非常に大きな負担ですね。

深川：そうですね。合意形成には、やはり会議を開いて、淡々と手続きを進めていくしかないので、私はそのようにしました。結果的にKFの資金受け入れ、成果も少しずつ出始めたのが2年目の終わりぐらいだったと思います。

出水：今のお話から、私たちが知っている初期の10年ぐらいの韓国研究センターの在り方が、やや脱線しかけていたところを、あるべき軌道に戻してくださったということですね。それは深川センター長の最大の功績と言っても過言ではないでしょう。そのおかげで今、センターはKFから日本国内で最大の支援を受けています。

深川：そうですか。

出水：KFの審査に関わっている先生からも、KF内におけるセンターへの高い評価について聞いています。そもそも今年は、KFの理事長が本学に来訪し、総長とも会談しています。深川先生がセンター長をお引き受けになった頃のKFとの微妙な関係は完全に払拭され、センターへの期待値が、かなり高まっているのが現状です。結局それは深川先生のおかげです。この場を借りて、あらためて感謝いたします。

深川：良かったですねと申し上げたいのですが、私の功績というよりも、そもそもなぜそのような状況に陥ったのか。今日はセンター長経験者が3人しかいませんけれども、歴代のセンター長がそろって反省会をしなければいけないのではないかと考えています。

出水：では、ここでいったん区切って、元兼先生に、お伺いします。元兼先生のセンター長ご就任に関しては、私自身がある種の当事者で、非常に申し訳なかったです。私が別のセンターのセンター長をしていたため、本来引き受けるべきところ、無理に元兼先生に引き受けていただきました。その間いろいろあったと思うのですが、いかがでしょう。

元兼：私は、今お話がありましたように、ワンポイントリリーフのつもりでしたので、1期だけの在任ですから、2年間の業績はさしてないのですけれども、ただ、今のお尋ねの趣旨からは外れるかもしれませんが、私自身は、先ほどのお話に出ていた、初期から続く第1期のメンバーの最後の時期に関わっており、またい

わば第2期の少し研究領域の偏っていた時期にも関わっていましたが、そして今の状況に至る時期にもつながっています。

そのことからすると、第2期の始まり、第4代中野センター長の時の前半2年に私が副センター長を拝命しましたが、その時の課題や、当時の対応と、私の第6代目の頃の2年間とは随分状況が違っていった感じがします。いずれにしても、常に何かを始めるというよりは、何かをうまく軟着陸させることに腐心する課題がありました。

例えば、私が副センター長をしていた頃でいえば、日韓の海峡圏カレッジをインソウルの大学や鹿児島まで広げていって、さらにはハワイまで含めて広げていく時期と、その所掌をどうするかという問題や、当時あったアジア太平洋未来研究センターとの関わりをどう整理するかなど、前からの流れをどのように整理統合していくかが、すごく大きな課題でした。移転はもちろん見越していたのですが、移転の話よりも、専任教員がちょうど退職の時期を迎えていたので、何とか1ポイントをいかにして維持確保するかという課題がありました。あの頃、活性化制度が入っていたので、実はもう韓セのポイントが0.9幾つかしかなくて、教授を採ることができないのではないかとの話もありました。そういう中でも、やはりセンターの基幹教員は中核となれる教授職を採りたいということで、そのあたりの検討をあれこれと算段していました。

それから同窓会関係です。韓国にある九大の同窓会との関係の紡ぎ直しなど、幾つか当時ならではの課題がありました。

それと、やはりちょうどいろいろな経緯があって、出水先生も深川先生も離れられていて、私1人が人文科学ではなく社会科学のほうに属する人間で、文学部の同窓会的な中に1人アウェイでいるような時期でもありました。

**出水：**朝鮮史の先生方と中野先生が中心であったということですね。

**元兼：**はい。ですから、今はあまり関わっていない方も含めて、非常に分厚くそのメンバーがいました。今の専任教員を採る前でしたけれども、科研申請書を書いてもらったり、そういう関わりをつくったりしていましたので、思い返せば、第2期の流れをつくるちょうど始まりのところにいると思います。なかなか1人でそれに抗する力もなかったのですが、九大韓国研究センターの今後の売りは歴史研究だということで人文に強く振りが振れた時期に入ったと思います。

その後、深川センター長の時代に分野を広げる方向で路線が変更され、そのご尽力のおかげで、私がバトンを引き継いだ時に、まずありがたかったのは、KFの支援事業で2冊の本が出来上がるタイミングだったことでした。あの2冊の叢書（そうしょ）が、それこそ今でいう複数のブランチを跨いだ形での出版となりました。1冊は経済のブランチですけれども、もう1つはいくつかの研究領域のブランチを跨いでおり、見える形で、今、九大が目指す「総合知で社会変革を牽引する」ということを示すものでした。しかもそれが伝統ある九州大学出版会から出されたことは、私がセンター長として本部の執行部などと話をする時の強みでした。ありがたい置き土産をくださったなとまず感じた次第です。

それと私の2年間で組織体制を見直すという課題がありました。これも結局丸々2年かかりました。設立当初のメンバー構成や、人員、スタッフからいえば、当時はその形でも良かったのでしょけれども、従来のような組織体制は機能なくなっていたのでもう少し流動性がある柔軟な組織をつくるように、2年間かけて組織のガバナンス体制を見直すことにもっとも注力しました。

あとは、先ほどありました「文庫」の問題です。書籍を中央図書館に移管する道筋を少しずつ、やはりこれも一つ一つ手続きを取り、予算も伴うことでしたので、幸いいろいろな形で当時、例えばデジタル化の予

算などの申し出も頂いて、それもあって少し加速度を付けて進められたと思っています。

ですので、私自身の在任中の成果はその程度なのですけれども、個人的に一番の貢献は深川先生と出水先生を呼び戻した事だと思っていますので、そういう意味でつなぎの役割を果たすことはできたものと考えています。以上です。

**出水：**ありがとうございます。私は元兼先生がセンター長の時に副センター長でした。まさに今おっしゃっていただいたように、深川先生が路線を転換して走り出し、うまく走り続けられるように体制を整備して下さったのが元兼先生だという位置付けになると思います。

ご指摘の組織改編は必要でした。大学全体の「総合知」という目標からしても、柔軟で機動的な共同研究を促進するため、組織改編を実現して下さったことで、現在のセンターのプロジェクトの進行が非常に円滑にできるようになりました。

また元兼先生にご説明いただいたように、資料や書籍について、先ほども言いましたけれども書籍は中央図書館への移管が終わっています。また資料のデジタル化についても、朝鮮史と協力しながら、かなりデジタル化を進めました。資料については、今後、九大の文書館などへの移管を検討します。

さらに、この間の懸案の一つである森田文庫に関しては、学内外の研究者と共同で調査、整理するプロジェクトをつくらうとしている最中です。ですので森田文庫に関しても、恐らく整理と公開、デジタル化は次年度以降、進むだろうと考えています。

そういう意味では、深川先生がご苦勞なされた方針転換に従い、多様な分野の共同研究のハブして、センターは機能を高めていくことになります。

ここまでで、お2人の先生方がセンター長の期間、移転の問題も含めて、大きな転換期に当たっていたのだと、改めて確認できたと思います。ここからは現状におけるセンターの課題を確認したいと思います。さらには、センターの展望に加え、より広くコリアンスタディーの展望、そこでセンターの役割などに話を展開していきたいと思います。

既に第三者的に外から眺めることができるようになっている深川先生のご意見や、あるいは依然としてセンターに関わって下さっていて現在プロジェクトも担当して下さっている元兼先生から、そのような観点から、それぞれご指摘をいただければと思います。

深川先生からよろしくお願いします。

**深川：**現状の課題は、私はもう外部の人間になっていますから、外から見たところどうかという話になるかと思いますが、その前に私の時の仕事に関して1点だけ付言をお願いします。私がセンター長を引き受けた時には、2010年代前半ぐらいまでに、センターで積み上がってきた現代社会研究の連続性や人間関係のネットワーク、あるいはKFや世界韓国研究コンソーシアムとのつながりが希薄になりかけていましたので、それらを復活させることが課題でした。これらの案件について、センターの中では異論もありましたけれども、結果的にはお認め頂いて今に至っています。それらは、私個人というよりも、皆さんの協力があったことということ付言しておきたいと思っています。

その上で、現在の課題についてです。私はセンターが最近どうなっているかと、時々センターのホームページを見るのですが、まず気になるのは、この鼎談の時点で、書庫のページが前と変わっていないことです。書庫のページが「整理中」になっています。おそらく10年くらい「整理中」のままです。改善点としては、ホームページを外から見て、センターの動きが分かるような方向で機敏に変えていかれたほうが良いです。外部の方がセンターについて知ろうとすると、先ずHPに目が向きます。私が見るに、以前のままで、

現状を反映せず、未修正の事柄が随分と残っているようです。ホームページ全体を隅々まで点検して修正されるのが良いでしょう。

あと、これは良い点だと思うのですが、私がセンター長の頃に比べると、かなり行事が活発だということです。センターのホームページを見ると、さまざまな研究会やセミナーの活動が見られます。今、恐らく出水先生と辻野先生が活発に見えます。

出水：元兼先生も含め、主要な何人かの先生方がそれぞれのネットワークを活かして活動しています。

深川：あれはすごいと思います。私の頃には、言文の李先生に代わって2018年に辻野先生が複担として参加されるようになりました。2年目の2019年に、「日韓市民100人対話」にお誘いし、参加いただきましたが、そこで人間関係を一気に広げられて、知り合いになった方々とさまざまな行事を企画されるようになりました。おそらくあの日韓市民100人対話が辻野先生にとっては「デビュー」だったと思います。その後、ホームページを見ると幅広く活躍してくださっており、本当に良い方に来ていただいたと思います。センターにとっても大きな財産のひとつで、今後のさらなる活躍を期待しています。

設立期からあまり変わっていないと思うのは、センターはいつも逆風の中で前に歩まなければいけない状況に置かれているということです。初代センター長の石川先生もNHKの「プロジェクトX」のようだと話されていました。私がセンター長の時もそれくらい大変なことに向き合っていました。今も同じような状況ではないかと思うのですが、その逆風の風の強さは時期によって違います。

出水：風向きも方向も違いますしね。

深川：そうですね。もう倒されそうなくらいの強風に向って前に進まなければいけないので、復担の先生方にも協力していただいて、私の時は特に波瀾先生に随分ご支援いただきました。センター長は4年間でしたが、波瀾先生は副センター長を6年やられたと思います。前のセンター長の時に2年と私の時の4年です。もう頼み込んで引き受けていただいたのですが、彼のサポートがなければ、私も風に倒れていた可能性があります。本当に助かりました。

改善すべき点ですが、研究センターはいろいろな分野の人が集まってきていて、そこで成果を出さなければいけないのは、以前も今も同じだと思うのですが、なかなかその成果の出し方は難しいです。例えば、私が経済だけで成果を出すのは自分が頑張れば良いことなのですが、経済だけというわけにはいかないので、異分野の皆さんのエネルギーをできるだけ成果の方向に向かわせるような流れをつくらないといけません。最終的には自立した研究者の集まりですから、それぞれが成果を出してというのが基本ではあるのですが、それが合わさった形でセンターの成果として出さなければいけません。

先ほどご紹介いただきましたけれども、やはり第三者の目で見ると、書籍が一つ方法としてあります。センター叢書の第1巻は稲葉先生、第2巻は濱田先生が出されてました。第3巻は松原先生と他の方の編著で、大変時間がかかったと聞いています。

私の時はKFの支援を受けて、3年間のプロジェクトの成果をまとめる形で刊行作業を進めました。元兼先生、波瀾先生、森平先生など、皆さんに集まっただき会議を重ねました。少し申し分けなく思っているのは、当初の「全員で1冊」という構想から、最終的に経済分野だけ別冊子にした点です。センターとして1冊に統合した方が望ましいのですが、やはり私や私をサポートしてくれた経済分野の先生方のことを考えると、経済は1冊の独立した書物にしたいという思いがありました。わがままというより判断の結果では

ありますが、最終的に2冊構成となりました。

これは継続的に検討すべき課題だと思います。韓国研究というディシプリンがあるわけではないので、それで書物を出すというのも、皆で一緒にやっているということを外に見せるために意義あることだと思いますけれども、専門分野の人から見ると分からないのです。専門分野の人から見ると、やはり特定の分野の韓国研究の書物にしたほうが分かりやすい。外部から評価を受ける時にどのような成果の出し方をするかは、私の経験から言うと、なかなか難しい問題で、慎重な検討が必要と考えています。

今はKFの支援を受けられているので、いずれ成果をまとめられると思うのですが、その時に、例えば出水先生ですと、KF独自にプログラムを持っていらっしゃるの、政治分野で成果を出されるのが分かりやすいと思うのですが、同時にセンターとしても支援を受けているので、その成果も示さないといけません。

さらに元兼先生や辻野先生、あるいは水野先生も、やはり自分の分野で書物として出したほうが、多分成果として分かりやすいのです。その調整が恐らく課題になっていくのではないかという気がしています。

KFの支援を受けて何年目ですか。

**出水：**この間、KFの理事長が来る時に調べたのですが、一貫して途切れたことがないので、単純に言えば、もう25年間受けていて、今26年目を受けている状態です。

**深川：**だから、私の時は3年間支援を受けて、私のセンター長退任後に出版されましたので3年半ですか。定期的にそういった成果物を出していくのが良いかなというのが一つです。

もう一つ言わせていただくと、ここ数年センターに若い人が集まっていません。

**出水：**だから次世代への継承が、現在のセンター長の私としては一番懸念しているし、一番の課題です。機会があれば常に言及しているのですが、なかなか難しいのは、分野を問わず、現状、大学に籍を置く研究者は、非常に短期的に数量的に成果を求められるところがある。自分の所属部局である種認定を受けることですら手いっぱいなのに、韓国研究センターという別の組織のために時間や手間を割いて学術研究に貢献すること自体が、若い人たちからすると、ものすごく無駄なこと、要らないことをしている感覚になっているのではないかという気がしています。

その感覚を超えて、やはり自身の研究にも、センターに参画することが役に立つのであるという実感が必要だろうと思います。先ほど日韓市民100人対話の参加を通じて辻野先生の取り組み方が変わったように深川先生に見えるというお話をされていました。基本的に研究者は、どこかで知的な好奇心が旺盛な人たちだと思うので、センターに関わるのが面白く、刺激を受けるような回路をどうつくるのかが具体的には課題とは思っています。

そもそも若い研究者が九大では減っています。任期付きでない若い研究者は一体どこにいるのだろうかという状況です。

**深川：**私が「若い人」と言わせていただいたのは、助教や任期付き教員だけではなくて大学院生、学生を含めてという意味です。最初は韓国研究センターの行事参加から関わっていただいて、将来的に韓国に興味を持って、必ずしも研究者でなくても良いと思います。若い人材を育て、韓国への関心を拡げていく役割をセンターは果たすべきです。崔先生が担当していた留学のプログラムもなくなってしまって、センターに若い人がいなくなっています。そうするとセンターの存在感も薄れていくので、これを取り戻さないといけない

という気がしています。

移転前のセンターは、箱崎のキャンパスの中のわかりやすいところに建物があったのですが、現在の建物は場所がわかり難く、文系のキャンパスからも、理系からも、どこにあるか分からない状況です。一時、文系キャンパスの中にスペースを作って移すという話が出たのですが、実現していません。

だからこそ、教員だけではなくて、まだどういふことを研究しようか、分野も決まっていな人たちも含めて、若い人を惹きつけるような何か魅力のあるセンターに、変わっていく必要が有ります。それは人物の魅力でも、活動の魅力でも構いません。いずれにしても、若い世代を呼び込む工夫が求められているという気がしています。

出水：ありがとうございます。

その点に関して言うと、実は今回のKFの申請では「コリアン・スタディーズ・サポーターズ」というアイデアを盛り込みました。それは学部の学生さんで、センターで行うセミナーやシンポジウムや講演会などに参加し、その都度、それをSNS上に発信してもらう。その中で、さらに興味がある人たちに手を挙げてもらって選抜し、年2回ソウルでのスタディーツアーに送り出すというものです。深川先生からご指摘のあった裾野を広げるといふことです。

ですので、段階的に、かつてのように、学部の学生の頃から韓国研究センターに関わる流れを復活させたい。今年の4月に着任した山口助教も、まさに海峡圏カレッジに参加した21世紀プログラムの学生で、かつ比文の大学院に行って、一貫してKFからの支援も受けてきました。そのような経緯で研究者となる方が、今後継続してきてくるような状況に、もっていくべきだといふご指摘だと思います。

深川：了解です。山口さんは学部の時に私の経済の授業に出ていたのを憶えています。

出水：彼女の21世紀プログラムの卒論は私たちのゼミに参加して書いています。まさに韓セが育てたといふても過言ではない人材です。

深川：そうですね。ご苦労は多いかと思ひますけれども、よろしくお願ひします。

出水：ありがとうございます。元兼先生、いかがでしょうか。

元兼：恐らく今の深川先生のお話とかなり重なると思ひたのですが、センター長を拜命して一番に感じたのは、対外的には韓国研究センターが存在することの意味は非常に大きいといふことです。マスメディアや、韓国からのお客さんなどは、九大に韓国研究センターがあることで、いろいろな期待を寄せてこられます。ニュースに対するコメントを求められたり、コロナも落ち着いて、今度九州に来る機会があるのでセンターに立ち寄りたいたいなどとよく連絡が来ていました。

ですので、やはりセンターといふ「箱」が九大にあることがすごく大事で、この箱はぜひ維持し続けたほうがよいのではないかと思ひています。もちろん韓国もアジアの一エリアではあるのですが、やはりそれだけではない別の意味が、特に歴史的意味も、または地政学的にもあると思ひています。

そうしたことを踏まえますと、今お話があったように、私も箱崎時代のイメージとの比較になるのですが、やはり象徴的な建物があって、常に学生たちがわさわさしていた印象があり、それが重要ではないかと思ひています。

改めて伊都に来て、学内でのプレゼンスをどう高めるかが大きな課題としてはまだ残っていると思います。まず、韓セがどこにあるか、何をしているか分からないということでは、存在意義としてまずいと思います。ただ、単に箱があるだけではなくて、行って何があるかも大事なことです。単なるガラ箱ではなくて、いかにそこに実を入れていくのが改善課題の一つめです。

もう一つは、これもすでに話が出て重なるのですが、九大自体が総合知を標榜する一方で、そもそも総合知とは何かという課題があります。今、センターの活動は活発にはなっているのですが、残念ながらランチがディシプリンなのです。ある種、ディシプリン別にいろいろな研究会をやっている状況で、同じ傘の下にいただけで、総合知にはまだなり得ていません。もちろん私も、出水先生や辻野先生が企画されているものに参加をする形での横のつながり、異分野交流はありますけれども、例えば学際的に同じイシューに対して別のアプローチで迫っていくような研究や研究会をつくっていく必要が今後はあるのではないのでしょうか。

そういう意味で、次のステージとしては、同じものを見ても、違うポジショニングから見る見え方の違いなど、それこそ一緒に韓国調査に行ったり、または韓国から来てもらって、日韓の共通課題を、PBLと言ってしまうと何か浅い感じですが、PBL的なイシューを共通に設定して、そこにそれぞれのディシプリンで迫っていくような立ち上げ方がこれからは必要になっていくように思います。

ただ、その時に課題なのが、若い研究者の巻き込み方です。うちは人環ができてもう25年経ちますが、人間環境学をつくれたかという問いかけに関しては、やはり道半ばというか、なかなか難しい面があります。もちろんこの四半世紀で建築学、社会学、人類学などと教育学との対話も増えて、学際的な取り組みのプロジェクトもさまざまにやっているのですが、やはり課題はいかに学生たちを巻き込んでいくのかということです。これに関しては、若い学生たちは目の前の自分の所属の分野で承認されないといけない問題があります。

また、ある程度ディシプリンが固まらないと、結局、学際といっても、ある程度大人の学問なので、それなりのディシプリンを磨いた後でないといけない部分もあるので、若い人たちにどのように関わってもらおうかというのは、一つ大きな課題だと思います。

そのような学問知をつくるのはわれわれシニアクラスの仕事だとしても、関わることによって気付きや、自分の狭さを思い知らされることは若い人にとっても有意義だと思います。私もこの韓セに関わって、韓国の歴史や文化、政治をめぐるいろいろな研究会などに出て、最初の頃、分からなかったのは、私は1965年の日韓国交正常化の年に生まれましたと自己紹介すると、私は親和的なつもりで言っても、すごくげん顔をされることでした。韓国側の反応があまりにも悪くて、時には翻訳されないこともありました。このことのもつ歴史的な政治的な意味が分かっていませんでした。

対象領域としての韓国の教育制度は見えていたのですが、やはり制度をめぐる文化的背景などその深みは他学問から学ぶことのほうが多いので、本来そういうことは若いうちからやっておくべきところだと思います。そこに若い方をどう巻き込んでいけるかは、やはりお金の問題もあります。その意味でKFの奨学金が、以前は九大で選考できていたのが、今は吸い上げられてしまって、なかなか大学でコントロールしたり、奨学金をもらった学生を集めることもできにくくなったり、いくつか課題があると思うので、先ほどお示しくださった出水先生の試みはすごく重要だと思った次第です。

やはり学生たちが集まってくれるような意味がある仕掛けをどうつくっていくかということ、これ自体がこれからの課題だと切に思います。以上です。

出水：分かります。

PBLの話が出ましたけれども、私自身、センター長を務めた決断科学で、自然科学や生命科学の先生方と多様な大学院生を教員集団として引率し、一緒に何かを調べるようなことを10年間やったのですけれども、改めて総合大学のすごさというか、同じ場所にも違うものが見えていることに驚愕（きょうがく）する場面が多々あったわけです。これこそ直感的には、経験、肌感覚で、総合知と呼ぶべきものだなと思いました。

やはり非常に具体的な課題、具体的な場所に目撃して、そこで多様な利害関係者と一緒に共同作業するような形が総合知なるものを解いていくための具体的な回路、手だてであると思っています。

ご承知のように、今センターには海峡圏SDGsプロジェクトがあって、1月に対馬市と協力して、韓国の行政安全部傘下の島振興院という、韓国の離島振興を担当している政府機関と、日本側の同様の社団法人と3者でセミナーを開きます。こういう形で、自治体や住民、政府機関など多様なステークホルダーと一緒に、非常に具体的なことができます。

なぜ対馬かというと、グローバルな課題としての海洋ゴミを単純に除去するだけではなく、再活用するためのプロジェクトを、自治体が支援して事業化し、民間企業と協力しながら、海洋ゴミを資源に変えようとしています。これを韓国で紹介すると、非常に関心があって、韓国の政府機関である島振興院と一緒に対馬へ行きましょうという話になったわけです。

韓国研究センターには、そのような多様な主体をつなぎ、共同研究を促進するハブとしての役割が担えると思います。そういう試みの延長線上に、まだかけ声にとどまっている九大の総合知なるものが見えてくるのではないかと。韓国研究センターが、それを具体的に示せば、学内的な評価も変わるのではないかと思います。

いずれにしても、具体的に分野を超えた共同の機会をどうつくるのかという課題は、元兼先生のご指摘のとおりで、ある程度は現在のセンター教員に、一部かもしれませんが、共有されているのではないかと気がします。そこにどれだけ学部学生や院生を巻き込んでいけるのか、さらに探究しないといけないところだとも思います。

それで、前後しますけれども、元兼先生がセンターの変化が起きた時期の話を経史的にまとめてくださったので、深川先生からセンター創設期の話も少しうかがいたいと思います。

立ち上げの時は、朝鮮史では六反田先生がまだおられ、われわれより年長である稲葉先生や濱田先生ももちろん、最も存在感と個性のある松原先生を含め、世代も違う、分野も違う顔ぶれでした。それ自体がなかなか面白く、特に私は一番年下だったのですけれども、それぞれの皆さんが既に研究者として一家言ある、しかも違う分野の人たちが集まっているので、そこで会議したり話したりすること自体が面白かったという記憶があります。

いかがですか、深川先生。

深川：そうですね。多分、他の学部の方と長い会議をやって、立ち上げの時期だから、かなりいろいろ議論しました。はっきりとは覚えていないのですけれども、おっしゃるとおり、大変でしたけれども、面白かったという記憶はあります。

出水：深川先生とのエピソードで、私の記憶に強く残っているのは、英語のセンター名をつくる時の議論です。深川先生がああでもない、こうでもない、仮にネイティブが見たらどうかということなど徹底的に検証なさって、いろいろな方の意見を聞きながら、現在の形にまとめてくださいました。あれはすごく印象深かったです。

深川：すみません、よく憶えていないのですが、アメリカやヨーロッパのセンター名はどうかというので、確かアメリカのパークレーだと Center for Korean Studies だと思うのですが、多分今の英語名は少し違っていたはずですよ。

出水：Research Center for Korean Studies ですよ。

深川：Research は要るのかとか、そういう議論がありました。その時はまだ始まっていなかったかもしれませんが、後で分かったのは、韓国研究コンソーシアムに行くと、世界中に同じようなセンターがあって、そこでの交流が出てくるので、今から考えると、英語名も重要かなと。議論できて良かったと思います。

出水：深川先生ご自身の初期の頃の思い出深いエピソードはありますか。

深川：私はセンターの教員を決めなければいけない時に、石川先生と、法学部から以前理事をされた先生…。

出水：柳原先生ですか。

深川：柳原先生と、梶山さんの後の総長だった人は誰でしたか…。

出水：有川先生ですね。

深川：有川先生と、私と稲葉先生もいたかな、6人ぐらいで、センターの建物の中で、誰をセンターの専任教員にするか話し合いました。結果的に松原先生になったのですが、結構長く時間をかけて、センターの教員の選考というよりも、そのメンバーでいろいろ話したことが良い思い出です。皆さんからセンターへの期待について様々な意見が出ました。

出水：でも、センター自体の設立は梶山総長に代わる前ですよ。杉岡総長の時ではないですか。

深川：ですかね。すみません、そのあたりは正確には憶えていません…。

出水：そのメンバーの中に有川先生がおられたのは、副学長だったのかもしれませんが。

深川：そうですね。それまで話をしたことがなかったような先生方といろいろ話ことができました。それだけでも楽しかったです。

出水：その段階でいうと、松原先生と同じ組織だったと思いますけれども、深川先生が一番松原先生というところがあったのではないかと思います。

深川：そうですね。私が、教養部から経済に移籍したのが1994年ですが、それから10年、研究室はそのまま、松原先生と同じ六本松にありました。松原先生とは実は長い付き合いで、松原先生が文学部で助手をされた頃からの付き合いです。出水先生もそうですね。

出水：そうです。私が一番最初に韓国語を習ったのが松原先生です。

深川：出水先生に最初にお会いしたのが松原先生の六本松の研究室で、確か外務省の専門調査員として釜山に赴任される前に挨拶に来られていて、最初にお会いした憶えがあります。

出水：そうかもしれません。

深川：松原先生とは、同じ建物の中にいたので、日常的にいろいろ話はしていました。ファンドを取ってくるのがお上手な方で、いろいろ学ばせていただいて、教えてもらった記憶があります。その後のセンターの運営に関しては、実はかなりぶつかりました。ご存じだと思いますけれども、センターの会議の、同報メールの議論で皆さんから見えるような状態で、ハッキリと対立したこともあります。非常に近い間柄ではあったのですけれども、最終的に路線は違った気はします。

出水：松原先生を知っている卒業生たちと話題になった時に言うのですけれども、完全に中小企業の経営者のノリでしたものね。

深川：そうです。だから、ブルドーザーのように何かを押し進めていく仕事には向いているかもしれませんが、皆さんの意見を聞きながらまとめていくということには、センター長の際にご苦労されたかと思えます。

出水：九大の関係者の中には、松原先生を否定的に評価される方も少なくありません。確かにそういう面はあるかもしれない。けれども、第三者的に突き放して見ると、やはり松原先生なくして韓国研究センターは立ち上がらなかったという側面もあると思います。

深川：松原先生の意気込み、エネルギーがあったからこそセンターが立ち上がったというのは、私も、そのとおりだと思います。建物を造るのは上手なのですけれども、その後の運営に課題があったようです。

出水：そうですね。どこからか、あのアイデアと、お金を引き出してくるのは手品みたいでした。でも、ご指摘のとおり、運営においては、途中でずさんさが出てきがちでした。

深川：大学の先生っぽくないところがありました。

出水：最近は、お目にかかる機会もありません。

深川：一度だけ福岡の韓国の総領事館のレセプションにセンター長として招待いただいた時に、その会場で松原先生に偶然お会いして、久しぶりでうれしかったですね。人間としては非常に面白いし、話して楽しいです。今でもまた会って話したいと思います。あまり機会がないのですけれども。ただ、仕事を一緒にやると問題もありました。

出水：そうですね。おっしゃるとおりだと思います。

それでは、そろそろ今後の展望の話を知りたいのですが、2つに分けたいと思います。既に触れているので、重複しても構わないのですが、今後の学術一般としてのコリアンスタディーズないしは日本国内におけるコリアンスタディーズを、韓国との関係も踏まえつつ、その発展の方向性についてどう考えるべきかアイデアをいただきたいということが一つ。それとの関係で、ではセンターはどういう役割を担うべきかというのが二つ目です。

非常に漠として、大き過ぎる話ではあると思います。が、あくまでも年報を読んでもらう方々に考える材料として使っていただくという趣旨で、幾つか今の時点でお考えになることをお聞かせ願えればと思います。

では、元兼先生からお伺いしてもよろしいですか。

**元兼**：難しいですね。まず、一昨日の教授会の後に、FDとして教授会のメンバーにサバティカル報告をしなければいけなくて、オンラインですけれども、30分ぐらい時間を取ってもらって、「韓国社会と教育の可能性、そして課題 一草の根民主主義と教育公正性-」というテーマで報告をし、質疑を受けました。

そこで感じたことは、韓国に対して関心は高いのですが、やはり情報が行き届いていませんね。これは日本のメディアの責任でもあるのですが、等身大で届けられていません。例えば、教育の話題でいえば、修学能力試験で、遅刻した学生を警察が白バイで運んだというようなニュースしか日本では報じられなくて、あとは、日本のメディア自体が親日か反日かの2択で捉えようとする傾向があって、今回の政権ができる前もそうでしたし、ちょうどその時期、戒厳令の時も向こうにいたので、本当に情報の格差をすごく感じました。

ですから、まずは韓国研究センターの役割として、近くて遠い韓国——これほどKポップやドラマがポピュラーと言う割には、韓国の方が日本に関心を持つほどは、日本人は韓国の政治や歴史に対して感度が低いのではないかと。K文学に対しても最近に関心が高くなっていると言われますが、それでもやはりまだまだ韓国人が日本の小説に関心を寄せるほどではないのではないかと感じています。そういうことを含めて、このセンターにはいろいろなメンバーがいますから、もう少し等身大の韓国を、市民レベルにも届けられるような取り組みを一つ、研究とはまた全然違いますが、やはり裾野を広げていく意味でも、存在意義を高める試みとしては必要かと思っています。

本当に研究者でさえもそういう状態なので、そこは深刻な課題として受け止めています。私も逆に発信の仕方がすごく難しいと思うのは、日本人の心性の中にはまだジャパン・アズ・ナンバーワンを引きずっているところがあるのか、韓国がこれだけ発展したりこれだけ進んでいると話をしても、それをにわかに信じてもらえなかったり、韓国を美化し過ぎているのではないかと「出羽守（でわのかみ）」みたいな受け止められ方をしますので、伝え方にも難しさをすごく感じます。

実際、垂直型から対等なパートナーシップへと言われるようになりましたけれども、先ほど申し上げたような情報の非対称性の課題があるので、韓国研究センターの1つの役割は、もっと発信力を高めていくことだと思っています。

研究面でいうと、これは大学本部が目指している方向と重なると思いますが、日韓両言語だけでなく、英語で研究物を出して行く必要はあると考えます。今は紙媒体でなくてもいいので、そういう器として。これも当初から、深川先生がセンター長の時から議論していたと思うのですが、年報を、学会と同じくセンターも同人サークルのようになりがちですけれども、世界から九大の韓国研究センターの年報紀要にアブライしてみたいと思わせるような、研究リサーチセンターとしてのジャーナル、クオリティペーパーといった質の高め方を目指す必要があると思います。こうやってセンター年報の誌面を使って鼎談をしているので、言っ

ていることがやや矛盾している感じもしますが、せっかくこういう媒体を持っているわけですから、センター年報これ自体の質を高めていくことは考えていく必要があると思っています。

**出水：**年報については、ご存じのように、ここにいらっしゃる先生方がセンター長の時代に徐々に改善されてきました。単なる事業報告ではなく、学術誌的な面を強化する方向は、この数年の年報で着実に進んできたと思います。

特集を組むことによって、先ほど元兼先生がおっしゃったような異分野が単に並列しているのではないかという限界はあるにせよ、多様な分野の研究をセンターが担えることを示せるのは大事だろうと思います。

深川先生がご指摘された叢書の刊行とも関係がありますが、年報がある種、学術誌、論文発表の場であるという性格を持ち始めたので、叢書と並行して複数の発信経路のひとつになりつつあるのではないかと感じています。さらに今の元兼先生のお話を踏まえると、複数言語で発信する必要もあるでしょう。既刊の年報も含め、英訳プロジェクトのようなことをやって、センターのホームページで公開することを検討します。あるいは、世界韓国学研究コンソーシアムのネットワークがあるので、コンソーシアムに参加している他言語の研究者の方に寄稿いただくことも視野に、何らか新機軸は出せるかなと、お話を伺っていて感じたところです。

深川先生は、いかがですか。

**深川：**今、お話しいただいたコンソーシアムの話に賛成です。コンソーシアムは、私のセンター長2年目に、お2人の院生の方と一緒にベルリン大学に行って、院生の発表をしました。発表は2日間にわたって15件ほど。発表言語は英語と韓国語が半分ずつでした。参加者は院生20人、教員15名ほど。カナダの先生が英文の学術誌への投稿方法についての、Publication Workshopを1時間ほど。その他にも、世界のセンター長会議、院生の優秀発表賞の選考会議がありました。KFの欧州本部の方も来席。ベルリン大のセンター長が大変に研究熱心な方で、今でもワークショップの連絡が来ます。2日間でいろいろな国の方が来られて、松原先生をつくったネットワークはすごいなと思いつながりを続けたほうが良いと感じました。

ただ、当時は、参加する時に少し紆余曲折がありました。実は、コンソーシアムから連絡が来ているのに、センターのほうで気付いていない状態が続いていました。どなたかが教えてくれて、急遽コンソーシアムの担当者に連絡して、参加に至りました。貴重な財産は継続していったほうが良いと思います。今はどうなっているか知りませんが。

**出水：**この間、参加しています。私が行けない場合が多々あったのですけれども、辻野先生や山口先生に参加いただきました。ただ、残念なのは、今、派遣する大学院生が見当たらない状態になっています。だから、センターの関係する教員だけが一応行って、顔つなぎをしている状態です。それでも、以前のように誰も行かないという話ではなくて、関係を再構築している状態です。来年はベルリンでやることになっています。

**深川：**楽しかったです。私が行った時はスペインの先生と仲良くなって、ずっと話し込んだりしました。韓国語で話すのです。

**出水：**そうですね。会議自体はほとんど韓国語で進行されていて、山口先生も驚いていました。

**深川：**私の時の会議は英語と韓国語が半分ずつでした。面白かったです。あれはセンター長の仕事として一

番刺激になったことです。

それと、話が元に戻りますけれども、そのような地域研究のセンターの集まりは、世界でどれぐらいあるのか知りませんが、経済分野では地域研究は低迷しています。現地調査せずに、統計データベースを利用して研究論文を作成する人が増えています。そのほうが短期間に成果が出せまじし、量産もできる。さらに相互に引用し合うことで業績評価もあがるという時代になっています。そういう状況下に、経済分野でフィールドワーク中心の地域研究をやる人間は減っています。

今、センターの複担教員でやっている水野先生はミャンマー研究者ですけれども、あの方も、地を這うような調査をされる方なのですが、そのような地域研究者は、全国的にはどんどん減っている状況です。それは専門分野によって違うと思いますが、韓国研究センターが地域研究はもっと面白いということを分野横断的に情報発信して、地域研究者を支援・応援する役割を果たしていければ良いのではないかと思います。

今年9月に私は韓国に現地調査に行きました。韓国の農村部で雇われている外国人労働者を調査しているので、冬季オリンピックが開催された茂朱という山奥まで、レンタカーを運転して、1人で調査に行きましたけれども、大変面白いですね。データ、統計、数字では拾えないような情報が、そこに行かないと分からないことがたくさんあります。そういった喜び、楽しさを伝えたいです。地域のフィールドに行けばそれを実感できるはずなのです。

だから、韓国研究を通じて、フィールドワークの喜びを伝えられるような機関が必要と感じています。全国的にも、「フィールドワーカーは絶滅危惧種になった」と嘆いている地域研究者は少なくありません。何とかしなければいけないと思っている人は多いはずですので、フィールドワーカーの支援・養成はセンターに期待される役割の一つではないかと思います。

それから、韓国との向き合いに話をずらすのですが、韓国の変化に関して鈍感になっているのではないかと思います。例えば、韓国の労働者の最低賃金が、今、日本と変わらなくなっています。円換算で、1,060円ぐらいで福岡県や熊本県よりもは韓国の方が高くなっています。

出水：韓国は全国一律ですからね。

深川：そうです。日本は地域ごとに違って、福岡や熊本は、東京より200円ほど低い。韓国は全国一律賃金で、それが文在寅政権の時にぐっと引き上げられて、今は、日本の地方を抜いてしまった。日本の賃金水準や経済水準が落ちていることには、韓国の人は気付いていますが、日本は鈍感のようです。

現状を見ていない人は、そういう時代感覚についていけないのではないかという気がしています。今の韓国に向き合うためには、現地を訪れ、現場を視察し、現地の研究者や機関とかかわりを持ちながら研究を進めることが大切です。こうした取り組みを、センターが後押し応援していただければと思っています。

では、どうするか。解決方法はないのですが、センターは今、KFの支援を受けられる状況になって、継続的にKFのファンドを獲得しています。しかし、ご存じのとおり、研究ファンドは獲得することよりも成果をあげることのほうが難しい。その資金を使って研究者を支援し、成果をあげることで、次のファンドの獲得につなげていくという流れを、どうつくっていくかが、まずはセンターの課題になりそうです。これは今だけではなく、昔からある課題です。けれども、今後のセンターの宿題的なものになっていくのだろうという気がしています。

取りあえず以上です。

出水：ありがとうございます。深川先生がおっしゃったことは、先ほどの元兼先生のご指摘と重なる部分があると思います。日本語圏における非常に平板な韓国観というか、韓国理解が、これだけKコンテンツがもてはやされるようになったとはいえ、やはり克服できていません。元兼先生の言葉で言うならば「等身大」で、深川先生がおっしゃったように、やはり生活実態とか。現在の韓国について、どうしても日本語圏のマスメディアの特質もあると思うのですけれども、旧態依然たる韓国像を再生産していることに対して、どれだけ私たちが違う韓国像を提起できるのでしょうか。そういった意味では、学術的なものだけではなく、広く一般に受容できるような形での情報発信も必要だろうという点は、お2人の先生方のご指摘の共通点ではないかと思えます。

また深川先生が言及なさった経済学の状況は、政治学の世界でも同様です。非常に単純化して、量的研究と質的研究という二分法で、量的研究がもてはやされる。非常に通俗的な理解だと思いますが、「科学的」なる呼称の下、量的研究のほうが重視されがちになっているわけです。

ただ、事例研究を介した質的研究、それは元兼先生が、先ほどサバティカル報告との関連でおっしゃったように、事象の背景や前提となる何かをきちんと押さえておかないと、どのような研究手法を使おうとも、現状を適切に分析したものにはなり得ないと思うのです。しかし残念ながら、少なくとも日本国内における研究状況で言うと、やはり短期的に、今もてはやされているような手法の中で、量産できることを優先せざるを得ない状況に、大学の研究者は置かれています。深川先生のご指摘は、それを補完するセンターになるべきだというご指摘として理解しました。

いずれにしても、非常に示唆深い、ご指摘ばかりでした。研究手法や研究ネットワークの在り方について、また、やはり財政的な持続可能性をどう追求するかという問題など。ここら辺の課題を抱えつつも、四半世紀続いてきたこと自体、今日振り返ってみても稀有なことだと感じます。同時にできた東大があれだけ細って、また比べられてきた早稲田、慶応、同志社、立命館のセンターが「一人センター」状態になりつつある中で、これだけの陣容で、これだけの活発な活動を続けていることは誇るべき現状であると思えます。

それを、いかに世代交代を円滑にし、持続可能にし、さらに今日確認できたような、学術一般としてのコリアンスタディーズの中の貢献ができるセンターにしていくのかということを考えながら、現センター長として微力ながらやっていきたいと思えます。引き続きご協力、ご支援、モラルサポートも含めて、よろしくお願いいたします。

最後に一言ずつ、今日ご参加いただいた感想を頂きたいので、深川先生、いかがですか。

深川：昔話も含めて、いろいろお話しできてよかったなというのが一つと、自分でいろいろ今話をしていて思ったのですけれども、まずセンターのためというよりも、センターに関わる人が自分の研究があるので、その自分の研究を進めるためにセンターとどう関わっていくかということが大事なのかなという気がします。それがないと、多分センターに誰も来てくれません。

センターに関わることで、自分の研究が前に進むというような状況をつくっていくのが理想です。なかなか難しいですけれども。みんな忙しいし、事務仕事が増えて、部局の仕事だけで手いっぱいになりつつあるので、それにプラスセンターに関わっていくとなると、大学はそれぞれの研究、最終的には個人の研究成果が求められる世界なので、それをさらに進めることができる状況を、全員がつくるのは難しいですけれども、そのようにしていかないと、多分、人は集まってこないし、集まってこないセンターも成立しないということです。抽象的ですが、それを構築していかれる出水先生に、ご苦労さまですと申し上げます。

出水：ありがとうございました。本当にご指摘のとおりで、まさに核心的な部分だと思います。

元兼先生、いかがですか。

元兼：当初、想定したよりも、断然深まりのある、すごくいい時間をもらえたなと思っています。ただ、オーラルヒストリーの難しさで、記憶はセピア色になって、本当に曖昧で、物語も頭の中で作られ直しているところもあり、また見る人の立ち位置によって見え方も違うので、そこは注意が必要と思います。

最後に、韓国研究センターの行方も心配ですが、九大自体の行方が今、心配です。それを考えたら、本当に韓セの取り扱いも含めて、うまくかじ取りしていかないと、箱の維持や、予算もどんどん厳しくなっていますので色々なことの維持が大変になると思います。そういう意味で、改めて九大の中で韓国研究をきちんと位置付けることと、やはり韓国本土からどう見られているのかも含めて、意識してやっていかなければいけないと思っています。以上です。

出水：それでは、長時間にわたって、本当にありがとうございました。繰り返しになりますが、韓セの円滑な世代交代と、これからの発展について、変わらず見守ってくださることをお願いいたします。

鼎談開催日：2025年10月24日

場所：九州大学韓国研究センター センター長室

## 4 李官厚氏（韓国立法調査処処長）講演会 「韓国の民主主義の危機と展望：戒厳および弾劾 以降の政党政治」（2025年11月21日：JR博多シティ会議室）

司会：緒方義広

### □講演者プロフィール

イギリス・ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）にて政治学博士を取得。  
韓国国務総理秘書室疎通メッセージ秘書官、建国大学常虚教養大学教授を経て、現在、韓国国会立法調査処長を務める。主著に『圧縮消滅社会（韓国語）』（ハンギョレ出版社、2024年）など。

司会（緒方）：（拍手）ありがとうございます。まず、李官厚さんのご紹介をしたいと思います。皆さん、ご存じとは思いますが、李官厚さんは韓国国会立法調査処というところの処長を務められておられます。ちょうど1年ほど前に就任されてから、任期が1年ぐらいたったところになります。

もともと政治学者として大変注目されている方で、私も個人的に同じ研究者仲間という形でお会いした経緯にはなります。イギリスのユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）にて政治学博士を取得されて、そして建国大学の教授も務められていました。

それ以外にもご紹介するときに韓国国内政治のいろいろな場面で、発言、発信をされてこられました。いろいろな政治の場面でアドバイスや調査をしてこられた李官厚さんは、韓国社会、韓国政治における比較的若手のキーパーソンであると紹介することができます。今日は、こういった李官厚さんのお話を福岡で聞ける非常に貴重な機会だと思います。

それから今日は、日本の外務省を現在休職されて、延世大学政治学科で博士課程にも在籍されている菊池令華さんに通訳をお願いしています。よろしくお願いいたします。

では、早速ですが、始めていききたいと思います。李官厚処長、よろしくお願いいたします。

李官厚：李官厚と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

今日は大変特別な講演といえます。私が日本で初めて行う講演です。また、これまでさまざまな場所で講演を行ってきましたけれども、恐らく聞いてくださる聴衆の中で、これまでの講演で一番若い方がいらっしゃるのではないかと思います。

お子様もいらっしゃいますけれども、途中で退屈してしまうかもしれませんので、お子様は部屋の中を行ったり来たりされてもいいですし、声を出されても大丈夫です。周りの大人の皆様が理解してくださるのであれば、スムーズに講演が進んでいくのではないかと考えています。

緒方教授が私を若手の研究者、学者と紹介してくださいましたが、初めて緒方教授にお会いした時は若かったです、今はそうではないような気がしています。

先ほど私の自己紹介をしていただきましたが、講演のために少しだけ追加で自分の紹介をさせていただきたいと思います。私は、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）でご紹介のとおり博士号を取りましたけれども、その時に日本との縁を感じたことがありました。私は、行く前には知りませんでした、有名

な日本人の卒業生の皆様の名前が建物に刻まれていました。

UCLの、私の先輩としてインドのガンジーがいらっしゃいましたし、日本の方としては伊藤博文元首相の名前、小泉純一郎元首相の名前がありましたし、そして文豪である夏目漱石氏も私の同窓だったということで、当時そのお名前を拝見しながら、いつか日本で講演をするような機会が来るのではないかと考えていました。

私の30歳以降の20年間の道りを改めて振り返ってみると、10年ほどは大学に、そして10年ほどは国会と政府機関で働いてまいりました。30代の初めに関しては、5年ほど補佐官として国会で勤務をしていましたし、その後、行政安全部で長官を補佐する補佐官としても仕事をしていました。また、コロナの時代は国務総理室の秘書官として仕事をしてきたことに加えて、昨年11月20日に現職である国会立法調査処の処長に任命されました。

私は、時々同僚の政治学者に、自分は立派な政治学者ではないかもしれないけれども、最も近くで政治を見通してきた政治学者として、言えることがあるのではないかと考えています。

今日の講演に関して言いますと、前半では戒厳令が公布された当日の実際の経験について、その夜何があったのか、皆様興味を持ってくださると思いますので、それについて説明したいと思います。そして後半では、韓国の民主主義が直面している危機、そして今後の展望についてお話ししたいと思います。

今日の講演を準備しながら、戒厳令が出されたその日の夜の状況について、当時実際に国会で何が起きていたのか、そして私が個人的に何をしたのかを、今回の講演のために表に整理してみました。

まず、12月3日22時過ぎに、私は、大統領が緊急の声明を出すという話を聞いてニュースを見始めました。その後、22時28分頃に大統領が戒厳令について宣言するという流れになりました。

韓国語をお読みになれる方は驚くと思いますけれども、こちらの表の私の動きのところに「裁縫」と書いています。「裁縫」と書かれている文字を見て戸惑った方もいらっしゃると思います。私がこの言葉を書いた理由としては、私はそれなりに国会で高いレベルの職務を全うさせていただいているわけですが、このような私でも戒厳令が宣布されることは全く予想ができなかったことをお伝えするためでした。

私は実は、その時間にニュースを見ながら息子の靴下の穴を裁縫していました。

大統領が22時28分に戒厳令を宣布しましたが、それを聞いて私は裁縫していた針を置いて、靴下が2足あるわけですが、「残りの1足は明日仕上げるね」と息子に言い残しました。

すぐに私は服を着替えて、上着を着て（今日もその日と同じ上着を着てきたわけです）、10分もせずに10時40分頃、タクシーに乗りに行きました。上着を着て家を出るところ、（私は国会に行くと言ったので）私の妻が「絶対に行かなければならないのか」と聞いてきました。

当時、私は冗談半分ではありましたが、自分は国会でそれなりの高い職務に就いているわけなので、「銃に撃たれて死んだとしても国会で死なないといけない。仮に自分が家にいる状態で逮捕されてしまったら、それこそ恥ずかしいことではないか」と言いつつ家を出ました。

私がなぜこのようなお話をしているのか、じきに分かると思います。

私の家から国会まではタクシーで40分から50分ほどかかりますが、タクシーに乗り始めて10分ほどした時に、国会の事務総長の、つまり国会の行政を総括する役割にいらっしゃる方の秘書室長から電話がかかってきました。秘書室長から「今どうすればいいのか」と尋ねられて、私は「今夜中に国会議員150名が集まると、私たちは生き残れる、生きられると思う。ただし、もし150名が国会に集まらなければ、私たちは皆逮捕されるだろう」という回答をしました。というのも、国会議員が300名いるわけですが、戒厳令を解除するためには少なくとも150名の賛同が必要なわけです。その夜の中に（国会議員）150名を集めることができればこの問題を解決することができるだろう、そうでなければ明日の朝には皆逮捕されるだろう、と言っ

たのはそういった意味でした。

私がタクシーで国会の近くに行った時に、漢江の上にヘリコプター3機が飛んでいるのをタクシーから確認することができました。

私が国会に到着した頃、禹元植（ウ・ウォンシク）（当時）国会議長も国会に到着しました。当時、警察が国会を封鎖していましたので門を通ることができず、国会議長は国会議事堂の塀を越えて中に入ってきました。私も、国会議長が中に入ってからおよそ10分後に国会議長が越えた塀の横の塀を越えて、国会議事堂に入ることができました。

その2分後（23時50分）、私が塀を越えて入って国会議事堂の建物の方に行っている時に、国会の運動場に着陸したヘリコプターから戒厳軍が降りてきて正門に向かっていました。私は角のところで戒厳軍と遭遇してしまいました。

後になって戒厳軍もあまり積極的に動いていなかったことを知ったわけですが、最初に戒厳軍と遭遇した時にはそのようなことは知るわけがなかったので、当時私から10メートルぐらいの距離で戒厳軍と遭遇したときは、もしここで捕まったらきっと死んでしまうのだろうという思いが脳裏をかすめました。それで、私は国会の建物の中に大変速い速度で走って入っていきましたが、その時のことについて友人には冗談半分に、「生まれてあんなに速く走ったのは初めてだと思う」とよく言いました。

私は、その5分後に国会の建物に入って国会議長室に入りましたが、その時国会の中にいた人たちが門を封鎖して、戒厳軍が入れないようにしました。私が国会の中に入れたほぼ最後のほうの1人でした。

その時刻に禹元植議長は5階に待機していたと表に書いています。韓国の国会は7階建てで地下もありますが、5階が最も特別ではない造りです。

国会議長室は国会議事堂の3階前方の最も目立つところに位置していますけれども、私たちの判断では、国会議長が3階の国会議長室にいたらターゲットになってしまって危ないと考えました。

私が23時55分に国会議事堂走って入った後、最初に同僚と一緒にしたことは、その時点で国会に入ってきている国会議員の数を数えることで、当時私が最初に聞いた数は81名でした。

当時、国会の職員の中で何人かを指名して、国会の中の国会議員数を1分ごとに報告するように指示しました。その数字の振り方を見るに150名という数字になるには深夜1時頃になるだろうと予測しました。150名が集まる前に、国会議長が先に逮捕されてしまったら本会議が進行できなくなるので、当時私たちの重要な任務のひとつは、国会議員が150名集まるまで議長を安全にお守りすることでした。私どもは、国会議員が120名ほど集まってから、議長が本会議場に入るのが安全だと考えました。その前に入ると、本会議場がターゲットになって捕まってしまうと判断しましたので、5階の最も目立たない部屋に国会議長にいてもらいました。

そして、深夜0時30分になった頃に120名程度が集まったという報告を聞きました。その時、禹元植議長が5階から降りてきてわれわれに幾つか指示をした上、本会議場に入られました。

その日私が初めて禹元植議長にお会いした時、23時55分に国会議長室に入った時に秘書室長が私に2つの話をしました。一つは、「国会が戒厳を解除するためには、まず政府から戒厳令の通知がなされないと行けないのに、その通知がまだ来ていない。そうだとしたら、これは手続的に問題があるのではないか。だとすると、私たちは（戒厳解除の手続きを）始めることができるか」についての質問でした。

それについて私は、「政府から戒厳令の通知は来ていない状況ではあるが、戒厳令の公布については23時23分にメディアを通してすでになされているのであり、また戒厳令の通知を国会が受けなかったのは、通知をしていない政府の責任であって国会には責任がないため、戒厳解除の手続きを進めていいと思われます」と答えました。私の答えを聞いた秘書室長は、国会における会議の進め方と運営を総括する議事局長と法律

の解析を担当している法制室長を呼んで、私（立法調査処長）の回答について検討しました。その結果、一理あるということでしたので、戒厳解除の手続きを進めることになりました。

2つ目の秘書室長からの質問は、今戒厳軍が国会に来ている状況がどのような状況であるのか、社会科学的にどのように解釈できるのかというものでした。それで、約30分間、これまでの様々な判例、特に光州事件に関する大法院判決を中心に検討して、今回の事態が光州事件と非常に類似しており、従って内乱に該当する可能性が高いという内容を、0時30分、国会議長に報告しました。

そして、0時35分に禹元植議長が本会議場に着席をして、会議の準備が本格的に始まったわけです。

国会議長が着席した4分後、0時39分に戒厳軍が国会のガラス窓を割って国会議事堂内に進入しました。私もこのような状況に鑑みるに、国会議長が着席した4分後に戒厳軍が窓を割って入ってきたということは、確実に内部をモニタリングしていて、これは議長を逮捕するための進入だと判断しました。

当時のエピソードを一つだけ申し上げますと、戒厳軍が国会のガラス窓を割って入った時、国会議長室には、私や秘書室長を含めてスタッフが5～6名いましたけれども、国会に入って1時間の間に、電話がかかってくることは全くありませんでした。恐らく大変忙しいだろうと周りが思ったでしょう。大変緊迫した状況の中で、そこにいた人々の電話が同時になり始めてびっくりしましたが、取ってみると全員家族からの電話でした。

私も12歳の息子から電話が来て、大変焦った緊迫した声で、「先ほどニュースを見るに、銃を持った軍人が国会に入ってしまったけれども、それを知っているのか、大丈夫なのか」と息子が聞いてきました。実は、私たちは、国会内部の監視カメラで全ての状況を見ていたので当然知っていましたけれども、家族からそのような電話がきて皆「忙しいから早く切ってくれ」と言っていました。

息子が電話をした時に、当時すごく怖い思いをしていたと思います。もともと本人が私にしたかった話としては、絶対に国会で死んでは駄目だよということと言いたかったと思いますけれども、その言葉自体がすごく恐怖を感じる文言ですので、もじもじしているのが電話を通じて感じられました。その言葉の代わりに息子が、「お父さん、必ず今日おうちに帰ってこないといけないよ」と言いましたけれども、その言葉を聞いた瞬間、すごく胸が詰まって、私も「もちろん家に帰らないと。必ず帰るから待っていてね」と伝えて電話を切りました。

当時国会議長室にいた5～6名のスタッフ全員がそのような電話を家族から受けたわけです。恐らく電話をかけてきた家族は、戒厳軍が進入して国会議長を逮捕しにいくはずなので、議長を補佐する補佐官たちや議長室にいたスタッフたちは最後まで抵抗をするだろう、そうだとしたらそこにいる自分の家族に生命の危機が及ぶのではないかと思います。電話をかけてきたのだと思います。

そして、0時47分に国会の本会議の開始宣言を禹元植議長がしましたけれども、戒厳解除の決議案が上程されたのが1時でしたので、15分弱かかったわけです。当時、国会本会議場の周りには、国会の補佐官たち、国会の事務所の職員たちを含めて200～300名が国会本会議場を囲んでいました。その人たちは1時頃戒厳解除決議案が上程されるという事実を知っていたので、戒厳軍が入ってから20分ほど時間があつたかわけですが、その時の雰囲気としては、自分たちがここで全員死んでしまうとしても必ず本会議場を守らないといけないという、決意がありました。

国会の本会議開始宣言の時に禹元植議長は「国会は民主主義の最後のとりでだ」とおっしゃったわけですが、皆さんが韓国の国会に行くと、国会の正門の前に置かれている大きな岩にこの文句が刻まれていることをご覧になれると思います。その岩は2025年8月に設置されました。

1時に戒厳令解除の決議案が上程され、1時3分に決議案が可決されました。そして、1時11分に戒厳軍が国会から撤収したわけですが、実際には完全に撤収したわけではなく、国会のすぐ外に700名以上の戒厳

軍が駐屯し続けていました。そしてそこには実弾1万発以上を積んだトラックもありました。

多くの方々が1時3分に状況が終了したと考えましたが、実際に戒厳が解除されたのは4時30分でしたので、国会の中にいた人たちは1時から4時30分まで、大変怖い思いをしていました。というのは、1980年5月の光州においても、最初に戒厳軍が都市に進入した時に、市民の強い抵抗に直面して一度外に撤退しましたが、その後実弾で武装した戒厳軍が再び進入してきた経験があったからであります。

2時を過ぎて3時になる間、その恐怖はますます大きくなりましたので、表の私の動きの部分に「再進入の恐怖」と書きました。そのような状況で、3時が過ぎたとき、そこにいたスタッフたちが集まって議長にメッセージの発表を提案しました。というのも、国会は戒厳令解除の決議案を可決したものの、大統領が戒厳を解除せずに、戒厳軍の国会再進入を指示する可能性もあると考えたからです。それで、4時頃に、主に戒厳軍を相手にして、「不当な命令に従って行動すべきではない。国会はすでに戒厳解除を決議した。」という内容のメッセージを発表することになりました。

その後、4時20分に軍の部隊が完全に撤退し始め、その10分後（4時30分）に尹錫悦大統領が戒厳を解除したというニュースに接しました。

尹錫悦大統領は、戒厳から10日あまりたった12月14日に国会で弾劾されることになりましたが、その後も様々な混乱が続きました。

当時、韓惠洙（ハン・ドクス）国務総理が大統領権限代行を務めていたわけですがけれども、憲法裁判所の裁判官の任命を保留することで弾劾裁判を遅延させようとしていました。そのため、韓惠洙大統領権限代行も12月27日に弾劾されることになりました。

そして、1月初めには尹錫悦大統領に対する逮捕令状が出ましたが、それも大統領警護室によって抵抗され、実際には執行されない事態が発生しました。

その後、また復帰した韓惠洙大統領権限代行が、いきなり新しい憲法裁判所の裁判官を指名することで弾劾裁判への介入の試みをしましたが、それに対して裁判所から中止命令を受けるといった事態にも発展しました。

今、会場の雰囲気重いので、少し冗談を言いますと、当時、禹元植国会議長が私に対して、「韓惠洙大統領権限代行が憲法裁判所の裁判官を任命するだろう？」と聞きましたが、私は「当然だと思います」と言いました。しかし、しませんでした。「尹錫悦大統領に対する逮捕令状が出だが、逮捕されるよね？」と聞かれた時には「逮捕令状出たのに、逮捕されないことがあり得るのでしょうか！」と言いましたが、また間違いました。最後に、韓惠洙大統領権限代行が無理して憲法裁判所の裁判官を指名する時にも、「そういうことがあり得るのか？」と聞かれましたが、私は「そのようなことが以前あったことがありません。そういうことはないと思います」と答えました。後に禹元植国会議長からは「立法調査処長は何も当たらないではないか」と言われてしまいました。

私がこのような冗談を申し上げるのは、当時の数ヶ月の間の状況が、政治学者から見て常識的には到底理解できないことが非常に多く起きたことを伝えたかったからです。

4月4日に尹錫悦大統領の弾劾宣告が行われ、6月3日に李在明大統領が当選されました。韓国の憲法では、大統領の座が空席になったら60日以内に新しい大統領を選出することになっているため、弾劾から2ヶ月以内に新しい大統領を選出したわけです。

現在尹錫悦大統領の裁判が進行中であり、恐らく1月頃には一審の判決が下されると予想されます。内乱罪に対する韓国の法定刑は死刑しかないため、内乱に当たるか否かが重要なキーポイントになりそうです。

そして、韓惠洙国務総理と金龍顕（キム・ヨンヒョン）国防部長官に関しても、現在尹錫悦大統領の裁判と同時に裁判が進行していますが、その判決も1月、2月頃に行われると思われれます。尹錫悦大統領に対す

る裁判の結果が出ると、恐らくその後1ヶ月以内に国務総理と国防部長官に対する判決も下されるのではないかと思います。韓国の法律では内乱の同調者も法定刑として死刑と無期懲役しかないため、非常に重要な裁判になりそうです。

今日の講演の共同主催団体である九州韓国研究者フォーラムの代表、平井先生が冒頭のあいさつでおっしゃっていましたけれども、韓国で非常戒厳令というのは、1980年以降45年ぶりであり、民主化以降は初めてのことでした。また、国会による非常戒厳の解除は1964年以降、61年ぶりに行われたことです。今回の非常戒厳は、通常民主主義の質的低下・後退（backsliding）と言われるものではなく、まさに憲政危機としてきたということで非常に衝撃的でした。

大きな危機ではありましたが、市民たちが抵抗し、国会が迅速に戒厳解除決議案を可決することで憲政危機が正常化されました。韓国政治のダイナミックとよく言われますが、これは、韓国政治において危機が大変大きく起こるけれども、それを意外とうまく克服するということを意味します。

日韓の政治学者が集まると、日本の政治学者の皆さんが、「韓国は大変政治がダイナミックな国で、研究課題が多くてうらやましい。一方、日本政治は研究のテーマが大変退屈なものになってしまう」と文句を言うことをよく耳にします。それに対して韓国の政治学者たちは、われわれも2つの問題を抱えると言います。1つは、まさに私もそうでしたけれども、戒厳のような大きなことをなぜ政治学者の誰も予測できなかったのか、という文句を言われます。もう一つは、何か事件が起きてそれについて研究していると、その研究の結果が出る前にまた別の事件が起きてしまうので、研究するのが大変難しいということです。

講演の後半部分の内容については、早めにご説明差し上げたいと思います。

これまで韓国政治について政治学者たちは体系的に2つの理論で理解してきました。マックス・ウェーバーやロストウに代表される近代化理論と民主主義定着（democratic consolidation）理論がそれであります。

第2次世界大戦以前に植民地だった国家が急速に経済発展するためには、最初は軍部エリートのような存在が国家のリーダーになるのが一般的でかつ望ましいものでもある。しかし、ある程度経済的発展を達成することになると、それ以降は中央集権的な方向性の強い経済計画よりは、民間部門における企業活動がもっと活発に行われなければならないため、市民社会が共に発展することになる。従って、軍部の権威主義から出発はしたものの、ある時点では民主主義へ移行するしかないことにあり、そのような民主主義への移行が行われた後にはそれがもっと強固化（consolidation）されるプロセスを経ることになる。韓国もそういうプロセスを辿ることになる。以上のように説明され予測されてきました。

民主主義への移行について説明するためには基準が必要であります。それについては大きく分けて4つの要素をあげることができます。1つ目は法治主義の確立、2つ目は独立的な司法システム、3つ目は競争的で公正な選挙、4つ目は発展した市民社会です。

政治学者の中では、2回以上の政権交代が連続的に行われることが非常に重要な基準となり、それが達成されたとき、民主主義から権威主義に戻りすることはもうないと主張する学者もいます。

この理論に韓国政治を当てはめてみると、1948年から1987年までは権威主義、1987年から2007年までは民主主義への移行、そして2007年以降には民主主義の定着（強固化）として理解することができると思われます。

1987年に民主化がなされましたけれども、その後選出された最初の大統領は軍人出身の盧泰愚（ノ・テウ）大統領でした。1992年に民間人出身の大統領が初めて当選されたのであり、その次の大統領選挙（1997年）では初めて政権交代が行われました。それは1948年以降初めてのことでした。2002年には再び進歩政党の盧武鉉（ノ・ムヒョン）候補が大統領に当選されたのであり、その2年後の2004年には、その政党が国会で初めて多数党になりました。その後、2007年と2012年には、改めて保守政党が2回続けて政権に就くことにな

りました。

先ほど説明した理論から見ると、2回以上の政権交代が行われ、また競争的かつ公正な選挙体制が完全に定着したように見えます。しかし、民主主義が定着したと思われていたそのときに、大統領が弾劾されることになり（2016年）、その8年後（2024年）には非常戒厳事態が起きて、翌年にまた大統領が弾劾されることとなります。10年の間に、大統領が2人も弾劾されることになったのです。

これをもって韓国の政治学者たちは、韓国の民主主義が崩壊した瞬間に、第3世界の民主主義に関するもっとも強力な理論であった民主主義定着理論も共に崩壊したと評価しました。それで、一体何が韓国の民主主義と民主主義定着理論を崩壊させたのかという問題意識のもとでいくつかの仮説について検討を進めました。

1つ目は、「韓国の民主的な憲政体制に欠陥があるのではないか」という疑問でした。

ところが、盧武鉉大統領の弾劾、朴槿惠（パク・クネ）大統領の弾劾、そして尹錫悦大統領の戒厳と弾劾にまで、いずれにおいても憲法裁判所がしっかり作動してそれらの問題を解決したので、韓国の憲政体制に欠陥はないと考えられました。

2つ目は、「韓国の選挙体制において問題があるのではないか」ということでした。これについても検討しましたが、韓国の選挙制度は非常に公正であり、とりわけ公権力による介入などの可能性はほとんどないので、もし現在韓国の選挙制度に問題があるとするならば、それは腐敗の問題ではなく、誰を選ぶかという価値と関連するものだと評価しました。

3つ目は、「韓国の市民社会が十分発展してないので、市民的権利が欠如しているから戒厳のような事態が発生したのではないか」ということでした。これについても、韓国の市民的権利は他の先進国と比べて不足しているわけでもなく、仮に韓国の市民社会の発展が遅れているとすれば市民たちが戒厳軍を阻止することはできなかったと判断しました。

それで最終的に考えたのは、これは民主主義の問題ではないかもしれない、ということでした。つまり、民主主義がある程度定着したものの、民主主義のもとで政治的に様々な問題が発生すると、それがむしろ民主主義において極端な脅威になり得る、と考えるようになりました。従って、民主主義の危機ではなく政治の危機として認識し、注目しているところですが、韓国政治におけるこのような政治の危機を考えると、いったい何が問題なのかに関して最近関心を持っているのが「両極化」です。

今年初めに行われた調査によると、韓国の進歩政党と保守政党を支持する有権者それぞれを調査したところ、50%以上が「相手のことが大変嫌い」、「見たくない」そして「相手の政党がなくなってほしい」という回答をしました。ここで重要なのは、「私はその政党に反対する」と言うのではなく、自分が支持していない政党が「なくなってほしい」と考えているということです。

大統領がうまくやっているかいないかについての推移を見ると、過去には保守的な国民であれ進歩的な国民であれ、程度の差はありますけれども、同じ方向性を見せていたことがわかります。大統領がよく働くと保守であれ進歩であれ、評価できる部分については評価し、よくできなかった部分については保守であれ進歩であれ、評価が下がるという傾向を見せてきました。しかし、2008年以降の傾向を見ていただくと、まったくもって反対の動きをするわけです。支持する政党によって国民の考えは、まったくもって一致なくなったといえます。同時期において、韓国の国民全体のイデオロギー的性向もだんだんと差が出てくるようになっていくことを見せています。それで韓国では、2010年を前後にした時期から韓国政治の両極化が始まったのではないかと評価しています。

そして、見慣れた事実かもしれないですが、そのような両極化が地域別にも克明に現れています。（進歩と保守の）2つの政党に対する地域別の支持が明確に分かれているといえます。

では、有権者の間で具体的にどのような現象が起きているか申し上げますと、最近もっとも目立つのは、イ

デオロギー的な両極化ではなく、情緒的・感情的な両極化としてその内容が変化していることです。今、韓国では、支持政党が異なる支持者の間で、相手は自分と考え方が異なる人だとはみなされず、自分より劣等な人、もしくは正常な知能を有していない人と評価することが多いです。日本においてもこのような状況があるかどうか分かりませんが、私と異なる支持政党を持つ人に対して、「バカではないか。どうしてその政党を支持することができるのか」と言うことは、実際に大変危険なことです。

他者との関係に関して政治心理学では5段階で区分しております。第1段階は友達になれる関係です。第2段階は、異邦人ではあるものの共に生きていける関係です。第3段階は一緒にいると少しごちない関係です。そして第4段階は、相手が嫌い、相手は正常な人ではないと思う関係ですが、今の韓国はまさにこの段階にきているといえます。これが危険であるのは、それが次の最後の第5段階に移ると、相手は正常な人々ではないので、この世から消えても良い人と考えられることになるからです。

最近、韓国の複数の世論調査では50%以上の回答者が、自分と支持政党が異なる人とは「決して結婚しない」、「自分の子供とも決して結婚させない」と回答しました。

時間が限られているので最後にこのスライドのみ説明を差し上げて、質疑応答に移りたいと思います。

朴槿恵大統領が弾劾された時、その弾劾を支持する国民は約95%でした。しかし、弾劾後行われた大統領選挙で文在寅大統領は41%しか得票できませんでした。その選挙において、文在寅候補以外にもう1人の進歩系候補者の得票率が9%だったので、当時進歩的な有権者は約50%で、保守系の候補者たちが得た得票数を全部合わせるとまた50%になります。

その次に行われた大統領選挙では、尹錫悦候補が当選されましたが、当時尹錫悦候補と李在明候補の得票率は各々48.5%と47.8%で、0.7%しか差がありませんでした。そして、直近の2025年6月の大統領選挙で李在明大統領は49.4%を得票しましたが、保守系候補であった金文洙（キム・ムンス）候補（41.2%）と李俊錫（イ・ジュンソク）候補（8.3%）の得票を合わせると49.5%で、つまりは保守系と進歩系で0.1%の差しかありませんでした。

韓国の憲法は大変堅固であり、韓国の選挙は透明で公正に行われており、韓国の市民社会も大変活発であるけれども、2016年以降、韓国の進歩と保守は有権者数においてほぼ1%の差もないほど互角に対立しつづけているため、そこから政治の両極化が発生し、それが極端な政治へと韓国の政治を追い詰めていっていると私は考えています。

このように、互いに極端な対立が続ける状況では、相手方の有権者を説得するよりも、自分を支持してくれる有権者を最大限投票場へ向かわせようとする、そのような動きを見せることになります。

少なくとも相当な時間の間はこのような状況が続けると予想されますが、この問題をどのように解決すべきかに関しては、私ももう少し頭を悩ませてみようかと思っています。

長時間集中して聞いてくださり感謝申し上げますとともに、特に長い間、静かに座ってくださった今日の一番若い聴衆にも感謝申し上げます。（拍手）

**司会（緒方）：**ありがとうございました。時間が非常に限られてはいますけれども、ぜひご質問を受けてお答えいただければと思っています。実践、それから理論と両方にわたって貴重なお話をしていただきましたけれども、まだまだ聞き足りないところがあると思いますので、ぜひお願いします。

—会場に集った聴衆から活発な質問が寄せられ、充実した質疑応答の後に閉会した。